中世下津宿を考える

鵜飼雅弘・蔭山誠一・
鬼頭　剛・鈴木正貴・
松田　訓

中世における尾張国下津宿の性格と景観を復元する為に、中世下津宿に関する文献史料と寺社の分析、明治 17 年作成の地籍図の分析、現在の地形解析、当該地の地表面踏査、下津周辺の発掘調査成果の分析などを行なった。その結果、中世における下津が旧三宅川と旧青木川の合流する「下津河」と中世東海道が交差することを推定し、地域における物流と京都から鎌倉を結ぶ主要なネットワークの要所に位置することを明らかにした。また 14 世紀以後には有力な寺院が形成され、守護所も置かれるなど、東西約 2.5km、南北約 3.0km の範囲に及ぶ「下津遺跡群」とも呼びうる拠点集落が営まれたことを指摘した。

はじめに

中世における下津は、中世鎌倉街道の主要な宿として文献資料にも出てくる著名な町であり、室町時代における尾張国の守護所がおかれたことが想定されてきた。

中世下津宿に関する考古学的研究では、昭和 55 年から稲沢市教育委員会により実施された下津城跡の発掘調査から始まり、その調査成果が井口喜晴氏により『新修稲沢市史』においてまとめられ、連郭式の形態をもつ城郭と城の東を現青木川に沿ってはしる鎌倉街道が推定された（井口 1984）。その後、稲沢市教育委員会による下津城跡の調査は継続され、その成果から、下津城跡が井口氏の想定した連郭式城郭とは別形態のものであるという問題が提示された（日野 1987）。平成 16 年に行われた守護所シンポジウムでは、鈴木正貴により稲沢市下津地域に所在する寺院（跡）や文献資料に登場する下津五日市、下津地域を流れていた旧河道などの分析から復元した下津守護所を室町時代の尾張地域における守護所が想定される遺跡群の変遷の中で、町屋を取り囲んだ総構えとなる織田系城郭遺跡以前の守護所形態に位置づけた（鈴木 2004）。また歴史学の立場からは、榎原雅治氏により旅行記等の記録や潮の干満の分析を通じ中世東海道の旅道中のあり方が復元され、下津宿について集落の東裏に断続的に見られる字界線と寺社にちなんだ小字を根拠に、萱津宿をモデルに青木川沿いに多数の寺院と市が開かれる景観を想定されている（榎原 2008）。

今回、これらの研究をふまえて、鵜飼・蔭山・鬼頭・鈴木・松田の 5 名は中世下津に注目し、中世下津宿に関する文献資料と地籍図による広域の旧河道の流路復元、下津地域の地形解析、周辺の遺跡調査の成果を分析することにより、中世における下津宿の景観と性格について検討を行うことにした。

なお、本論における地名の表記は、西暦 2000 年（平成 12 年）時点の市町村名を使用し、明治 17 年作成の地籍図の解析に関し、地籍図中に記載された旧村名を地域名として表記する。（蔭山誠一・鵜飼雅弘）

文献資料等から見た中世下津

稲沢市北東部は尾張国府推定地（尾張大国霊社周辺、稲沢市国府宮町・松下町）に隣接する。三宅川・青木川に挟まれたこの地域は古代・中世を通じて中島郡に属した。ことに下津に関する文献史料は豊富であり、すでに詳細な検討が行われている（『新修稲沢市史』本文編、1990 など）ものの、周辺を含めた地域の全貌は把握し切れていないのが現状である。ここでは先行研究の成果をふまえ、13・14 世紀を中心とするこの地域の歴史的景観について、一宮市南部を含めて検討を試みる。

（1）下津と赤池

「下津」に関する最古の記述は、養和元(1181)年墨俣川の戦いに敗れた源行家の軍勢が「折戸の宿」に陣をとったとする『新定源平盛衰記』の記事であり（『稲沢の街道Ⅰ－鎌倉街道と岐阜街道－』)、この時代「折戸」と呼ばれていたことがわかる。また「赤池」は慈光寺本『承久記』に、承久元(1221)年北条時房の軍勢が「赤池ノ宿」に到着したと記されている(『愛知県史　資料編８　中世１』177号、以下『県史資料編　中世１』と略す)。無住の『沙石集』巻二「薬師観音利益ノ事」では、右馬允某が杭瀬の戦いに敗れ領地へ逃げ延びる途中、「下津河水マサリテ」渡河がかなわず捕らえられたと記す（『県史資料編　中世１』181号)。某は承久の乱の際朝廷方についた山田重忠の一族明長と推測されている（『新編日本古典文学全集』など）が、無住が山田氏の菩提寺とされる長母寺の住職を長く務めた点を勘案すると、記事は検討に値する内容である。

建長四(1252)年、後嵯峨天皇の子宗尊親王が鎌倉幕府の将軍に迎えられる。旅の途上３月22日に黒田を経て萱津宿へ向かった(『吾妻鏡』、『県史資料編　中世１』331号）が、『宗尊親王鎌倉御下向記』によると、「御すくずく（宿々）ならびにひる（昼）のおまうけ（御儲け）の所」として「あかいけ」が挙げられている（『県史資料編　中世１』332号)。また弘長二(1262)年叡尊は鎌倉に赴く途上、２月10日に「折戸宿」にて中食を摂り、長母寺に向かった（「関東往還記」、『県史資料編　中世１』378号)。これらの記事は、「折戸」のほかに「赤池」にも宿が存在した可能性を示唆し、その後阿仏尼の『十六夜日記』などの旅行記に「下津」が記されることから、13世紀半ば以降交通の要衝としての機能が高まった事が伺える。また正和三(1314)年、「下津五日市」の地頭代が尾張国大成荘への乱入の件で六波羅探題に上洛を命ぜられた記事から、市の存在が知られている（「尾張国大成荘関係文書」、『県史資料編　中世１』722号)。

14世紀半ば以降、下津は南北朝動乱の舞台となる。建武二(1335)年、足利尊氏は中先代の乱鎮圧のため関東に赴く途中宿泊し、暦応元(1338)年には幕府と北畠顕家が交戦している。動乱の終結後、知行国主醍醐寺三宝院の初任検注に際し国衙から提出された応永四（1397）年１月付「尾張国目代注進状」(『県史資料編　中世２』705号）によると、国衙正税地である「一（市）保」は守護代の知行下にあり、未進である事が報告されている。また「尾張国国衙荘当知行分注文」(『県史資料編　中世２』838号)、「尾張国国衙領内福阿分注文」(『県史資料編　中世２』839号）にある「さかい彦左衛門」は斯波氏の被官と考えられている（『新編一宮市史』本文編上）事から、14世紀末には下津が守護の支配下にあったことが明らかとなる。明確な時期は不明なものの、尾張に守護所が置かれたのもほぼ同じ時期と考えられる。

15世紀にも下津宿は機能していた事が知られるが、応仁・文明の乱の影響は当地にも及び、文正元（1466）年には下津で守護代織田敏広が斯波義敏方の軍勢に攻められ、文明八（1476）年織田敏定が下津を焼き、敏広は国府宮へ退陣した。近世に入り、岐阜街道の整備とともに集落は街道沿いに移転、整備された。

（2）下津・赤池周辺の地名

次に下津・赤池周辺の地名について、寺院・神社・御厨・村の名称から検討するが、寺院については後述し、ここでは寺院以外の名称についてまとめる（図１)。

まず神社は、国衙の祭祀体系に組み込まれた式内社の位置が問題となる。貞治三(1364)年の年記をもつ群書類従本「尾張国内神名帳」(『県史資料編　中世１』16号）によると、下津・赤池周辺には正一位に於保名神・国玉名神、従二位上に宗形天神、従三位上に川曲天神の名がみられる。このうち国玉名神は尾張大国魂神社、宗形天神は宗方社（いずれも稲沢市国府宮町）に、於保名神は於保神社（一宮市大和町)、川曲天神は川曲神社（稲沢市子生和町）にそれぞれ比定できる。式内社以外の神社のうち、尾張藩の地誌『寛文村々覚書』に社領を「前々除」されているものは、16世紀までに成立した可能性が高い。しかし稲沢市域の「尾張国内神名帳」記載式内社について、大国魂神社・金名名神・鈴置地神以外は近世までの廃絶や名称の変更が想定されていること（『新修稲沢市史』本文編)、

図 1　下津周辺の中世の地名（1:30,000、国土地理院発行地形図 25,000 分の 1 の清洲・一宮を縮小）

神社のほとんどが勧請の由緒を残さないことから、成立起源を特定することはできない。

次に郷・村・御厨の地名を検討する。中世の中島郡は大国霊社を境に北条・南条に分かれており（『新編名古屋市史』第２巻、尾張国衙領の散在性を示す史料として知られる「浄金剛院領尾張国千世氏荘坪付注進状案」（今回は『県史資料編　中世１』478 号を参照した。以下「千世氏荘注進状案」と略す）には、中島郡北条河崎郷に属する里・村が見られる。河崎郷は『和名抄』にも記載されており古代にさかのぼる事が確実だが、里の位置は奈墓里（稲沢市長束町）を除き遺称地がなく、不明である。しかし村の名称としては、元今次郎名に井口村（稲沢市井之口町）、友重名に赤池村（稲沢市赤池町）、永吉・小熊名に於保村（一宮市大和町於保）を挙げる事ができる。また河和村は稲沢市子生和町に比定されている。このほか延文五 (1360) 年の年紀を持つ『神鳳抄』には、内宮領陸田御厨・下津御厨・赤池が記載されており、陸田には「田一町畠七町」、赤池には「畠二町」と記載されている (『県史資料編　中世１』1508 号)。ただし建久三 (1192) 年「伊勢神宮神領注文写」には見られない（『新修稲沢市史』資料編７）ため、これらの御厨が鎌倉時代に成立した可能性がある。

以上挙げた村々が畠地と記載されていることは、13・4 世紀の村の多くが自然堤防上に立地しているとする上村喜久子氏の指摘を裏付ける（「中世尾張の「村」について」）。なお「千世氏荘注進状案」などに見られる重枝次郎丸名については、遺称地として稲沢市治郎丸町が考えられているが、鎌田村および須賀村の比定地が不明であり、検討の余地が残る。14 世紀後半までに成立した村としては、長野村（稲沢市長野町）がある。真言宗の有力寺院万徳寺は後述するように 13 世紀後半に再興されたが、同寺所蔵『覚禅鈔』奥書（『新修稲沢市史』資料編７）に長野村あるいは長沼村と記載されているものがあり、遅くとも 14 世紀半ばまでに村が成立していたことは確かである。なお巻九十六には「久田郷長沼村」なる名称が見られるが、『和名抄』に記載がないことから中世的な郷であり、河崎郷から分出した可能性がある。

「千世氏荘注進状案」には村以外の地名として、鈴裳名・永吉名に見られる「府中」が記載されており、惣社（大国霊神社）を含む範囲が推測されている（『新修稲沢市史』本文編）。

（３）寺院の消長

続いて中世に存在した可能性のある寺院を検討する。尾張藩により寛文十三（1673）年に編纂された『寛文村々覚書』は、江戸前期における村の姿を知る上で基本的文献となるが、とりわけ寺領に「前々除」と記載されているものは、慶長十三（1608）年以前に開基・草創した寺院である根拠となり得る。下津村および周辺７カ村（陸田・赤池・子生和・伝法寺・五日市場・九日市場・長野）の 19 カ寺を対象にすると、「前々除」と記載があるものは 11 カ寺を数える。うち正眼寺は丹羽郡伝法寺村内に所在し、寺領は春日井郡宇福寺村にある。このほか浄土真宗・日蓮宗に属する寺院は、寺内年貢地との記載がある。そこで文政五（1822）年成立の『尾張徇行記』に記載された寺伝および由緒書を参照し、中世における寺院成立の特色を考察する。

『尾張徇行記』で中世に開基・草創されたとする寺伝が記載されている寺院は８カ寺である。天台宗円光寺（下津村）は建久年間（1190 年代）山田郡に寺領を持ち、仁王門が弘長二（1262）年創建されたとする寺伝を持つ。真言宗万徳寺（長野村）は建長六（1254）年、常圓により再興されたといわれる。正眼寺（伝法寺村）は応永元（1394）年天鷹禅師を開基として創建され、元禄二（1689）年、丹羽郡三ツ渕村へ移転した。曹洞宗広幡寺（下津村）は享禄二（1529）年、丹羽郡川井村で創建され、天文十（1541）年に下津へ移転したとする。浄土真宗福専寺（陸田村）は前身を福専坊と呼び、明応元（1492）年に成立した。臨済宗慈眼寺（子生和村）の前身は慈眼庵と呼び、永徳元（1381）年創建された。日蓮宗妙法寺（九日市場村）は享徳二（1453）年に創建された。このほか日蓮宗妙長寺（下津村）は文明十（1478）年に創建、天正十四（1586）年清洲へ移転し、慶長十五（1610）年名古屋へ移転し、照遠寺と改称した。妙長寺の跡地には番神堂が建てられたが、天正末年の焼失後、東下町に移転した。

ついで『尾張徇行記』に記載されない寺伝を

持つ寺院には、浄土真宗阿弥陀寺（下津村）、臨済宗頓乗寺（下津村）の２カ寺がある。阿弥陀寺は前身を曩謨寺といい、延応二（1239）年に成立した真言宗寺院であったとする。文明年間（1469～87）に浄土真宗に転じた。また頓乗寺は貞和三（1347）年、時宗寺院として成立したとする寺伝を持つ。寛永七（1630）年に曹洞宗寺院として再興され字旧跡に所在したが、享保二（1717）年、西片町の現在地に移転した。

下津村には寺院にちなんだ字名が散見される。このうち字薬師院は住吉薬師堂のことをさすと考えられる。応永廿六（1419）年織田教継寄進状に、もとは虫鹿氏の本領であった長野の田地三段大が薬師堂に寄進されており（妙興寺文書、『県史資料編　中世２』1130　号）、嘉吉三（1443）年には坂井春智から長福寺重専坊に坊主職が充行われている（『県史資料編　中世１』1728号）。また「住吉」の名称から、住吉神社の成立が15世紀にさかのぼる可能性が考えられる。その後薬師堂は16世紀後半までに万徳寺へ引き移ったとされる（天正十（1582）年九月十五日付「万徳寺寺領帳」、『新修稲沢市史』資料編７、ただし後世の加筆か）。字光明寺は『寛文村々覚書』に見られる曹洞宗光明寺であるが、天明二（1782）年日蓮宗に改宗し、等樹寺と改称された。字元番神は先に挙げた妙長寺の跡地である。字地名としてはほかに字不断光寺・字信正寺・字知光寺があるが、現存する寺院はない。中世以前に存在した寺院跡地の可能性がある。

ここで稲沢市北東部における中世の寺院形成を整理すると、12世紀から13世紀にかけ、天台宗・真言宗寺院の再興・景観の整備が進んだ。これに久安五（1149）年には存在が確認される真言宗性海寺（大塚村）が、建長年間（1249～56）良敏により再興されたことも加えられよう。14世紀半ばには臨済宗妙興寺（妙興寺村、貞和三（1348）年創建）や正眼寺が創建され、所領寄進による寺領形成が進んだ。やがてこれらの寺院は地域の有力寺院として、16世紀以降周辺に末寺を形成する。また15世紀半ばには日蓮宗・浄土真宗の進出が顕著となる。これらはすでに『新修稲沢市史』に指摘されているが、近世に至るまで寺院の改宗や移転が目立つこと、寺院跡が遺称地名として残ることなどから、寺院の経営が不安定であったことも考えられる。

（４）小結

以上３点の分析をもとに稲沢市北東部の歴史的経過をたどると、12世紀後半から13世紀前半にかけて折戸・赤池の名称が現れ、下津河の存在が想定される。このことは下津河をはさんで宿が形成されたことを示し、鎌倉街道の経路上に渡河地点が存在した。13世紀後半には折戸は下津と呼ばれるようになり、宿泊施設や市を伴った景観が生まれたと考えられるが、赤池宿の名称は見られなくなる。また下津周辺には国衙領・御厨が分布するが、万徳寺など寺院の創建・再興が相次いでいる事、村の名称が現れる事などから、承久の乱後この地域で支配の再編が起きた可能性も考えられよう。南北朝動乱後は守護の支配が次第に浸透し、守護所が形成される。ただし中世尾張の政治動向との関わりにはなお不明な点が多く、検討課題は多い。

（鵜飼雅弘）

地籍図の解析

「下津」を分析するにあたり、これまでに明治17年作成の地籍図については愛知県埋蔵文化財センター加藤博紀により図化された旧下津村と同センター報告書「島崎遺跡」により図化された現一宮市東部の分析があり、今回は新たに現稲沢市北東部の地域から現一宮市南東部について図化したものを加えて解析を行った（図２）*。今回は図２のように、宅地・畑地等の微高地群を21箇所（微高地群１～微高地群21）と微高地群に挟まれた水田域等の低地部22箇所（低地部１～低地部22）を抽出した。ここでは今回分析の対象となる稲沢市北東部から一宮市南東部の微高地群と低地部について現在に至る三宅川と青木川、五条川、及び他の河川の河道の変遷がさほど大きくはなかったと仮定した場

* 図化した地籍図名
中島郡：一宮村（一部）、宮地花池村（一部）、妙興寺村、赤池村、陸田村、子生和村、氏永村、於保村、下津村、長野村、治郎丸村、小池正明寺村、島村、国府宮村、稲島村
丹羽郡：馬見塚村、森本村、猿海道村、吾蔓村、平島村、多加木村、外崎村、三ツ井村、伝法寺村、九日市場村、五日市場村

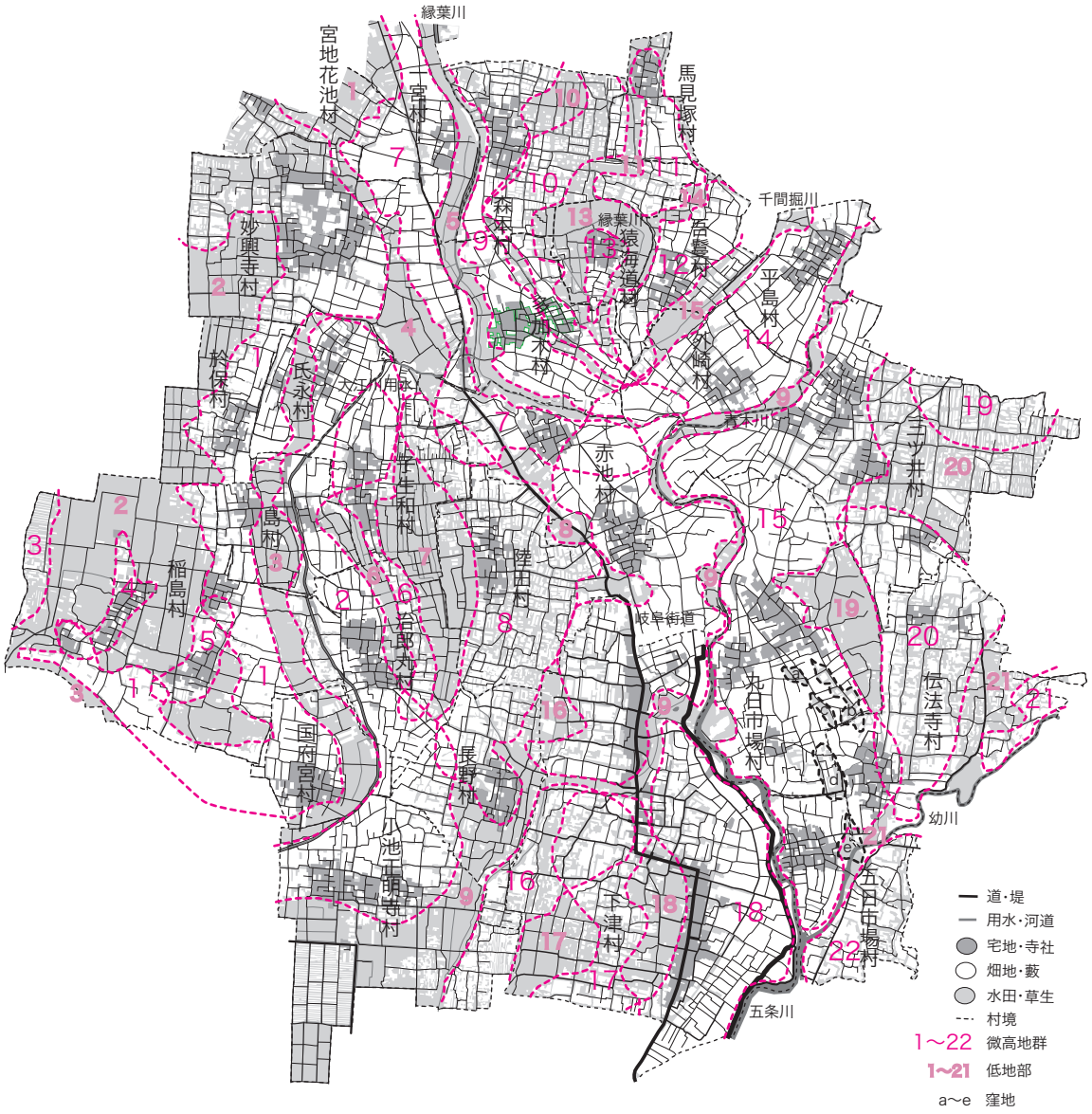


図２　一宮市南東部から稲沢市北東部の地籍図（約 1:40,000）

合の旧三宅川により形成されたと考えられるもの、旧青木川により形成されたと考えられるもの、その他の旧河川により形成されたと考えられたものに分けて述べる。なお、これまでの研究を追認するが、比較的大規模な河川は２つの並行する微高地群２箇所とその微高地群に挟まれた低地部１箇所をもって旧流路の痕跡とした。また小規模な河川は１箇所の微高地群の中に流路の痕跡と思われる水田域（低地部）を確認できる場合がある。

尚、明治 17 年作成の地籍図において、それ以前に形成された地形に加えて、江戸時代における用水掘削や岐阜街道の整備等の開発に伴う大きな地形改変が認められる。中世以前に形成された地形と江戸時代の地形改変を完全に分別することは困難である為、明らかに江戸時代の地形改変が判明するものは地形の分類において考慮している。

（１）旧三宅川により形成された地形

旧三宅川により形成されたと考えられる地形が５箇所（地形Ａ～地形Ｅ）推定できる。

地形Ａは微高地群１（宮地花池村南部・妙興寺村中央部から於保村・氏永村西部、島村西部、稲島村東部、国府宮村を経て再び稲島村南部に至る）と微高地群２（妙興寺村南部の微高地群１から氏永村、子生和村に分かれ、島村東部、

治郎丸村、長野村西部、小池正明寺村に至る）に挟まれた低地部３（氏永村中央部から稲島村中央部、国府宮村東部、小池正明寺村北西隅部に至る）で、現在の稲沢市内に見られる旧三宅川の蛇行流路痕である。地形Ｂは微高地群２と微高地群６（子生和村の微高地群２から分かれ、治郎丸村中央部を経て、治郎丸村南部にて微高地群２と合流する）に挟まれた低地部６（島村南東部・子生和村南西部から治郎丸村中央部に至る）で、低地部６が島村付近にて地形Ａの低地部３から南東にのびる形であるが、低地部６が南にて微高地群２で止まることから、地形Ａに先行する地形である。地形Ｃは微高地群６と微高地群８（子生和村東部から陸田村中央部、長野村西側に至る、長野村西側で微高地群２に合流する）に挟まれた低地部７（子生和村中央部から治郎丸村東部に至る）で、低地部７の北側が微高地群６により、低地部７の南側が微高地群２及び微高地群６により止まることから、地形Ａと地形Ｂに先行する地形である。地形Ｄは微高地群１から微高地群２北側とその北西に位置する低地部４（妙興寺村南西部付近）で、低地部４が微高地群２・微高地群６を切っていることから、地形Ａと地形Ｂより新しい地形である。地形Ｅは微高地群７（一宮村南部の字牛野から多加木村南西部、赤池村北部に至る）と微高地群９（森本村西部から多加木村を経て外崎村西部に至る、微高地群 14 の西部にて合流する）に挟まれた低地部５（一宮村南東部端・森本村西端部から多加木村西側を経て、赤池村北側に至る）で、微高地群７が低地部４を塞ぐ形で形成されていること、低地部５が旧青木川により形成されたと考えられる微高地群 14 で止まることから、旧三宅川に関連する地形としては最も新しいものであるが、現在の青木川につながる地形よりは古いものである。

（２）旧青木川により形成された地形

旧青木川により形成されと考えられる地形が２箇所（地形Ｆ・地形Ｇ）みられる。

地形Ｆは北側が微高地群 14（平島村から外崎村、赤池村、下津村北側に至る）と微高地群 15（三ツ井村北西部から九日市場村西側、伝法寺村南西部を経て、五日市場村に至る）に挟まれた低地部９（平島村と三ツ井村の村境付近から外崎村と三ツ井村の村境付近、赤池村と九日市場村の村境付近を経て、下津村、長野村東部、小池正明寺村東側に至る）で、低地部９の南側が微高地群８の南部・微高地群２の南部と微高地群 16 に挟まれた現青木川付近から加藤の指摘（加藤 2009）にある字「蛇池」から下津北山遺跡で検出された中世の河道に対応する。地形Ｇは比較的小規模な河川により形成された地形と考えられるもので低地部がほとんど形成されていないが、低地部９から南流する形である低地部が微高地群 18（下津村東部）と微高地群 15 の南部に挟まれた現在の青木川下流部につながることから、地形Ｆと同時存在していた時期があり、その後現在に至るまで大きな変形がない地形である。

（３）その他の旧河川により形成された地形

その他の旧河川により形成されたと考えられる地形として７箇所（地形Ｈ・地形Ｉ～地形Ｌ・地形Ｍ・地形Ｎ）が抽出できる。

地形Ｈは微高地群４（稲島村西部、南側で微高地群１と合流する）と微高地群５（稲島村中央部、南側で微高地群１と合流する）に挟まれた低地部２（妙興寺村南西部から於保村西部を経て稲島村西部に至る）で、低地部２が旧三宅川により形成されたと考えられる微高地群１で止まることから、地形Ａに先行するものである。地形Ｉは微高地群 10（森本村東部から多加木村北側に至る）と微高地群 11（馬見塚村から吾村北西部・森本村南東部に至る）に挟まれた低地部 11（馬見塚村中央部から森本村南部に至る）で、低地部 11 は猿海道村にて低地部 13 と合流する。地形Ｊは微高地群 10 ～微高地群 12（吾蔓村南部から多加木村東部に至る）と微高地群 13（猿海道村中央部）に挟まれた低地部 13（猿海道村縁辺部付近）で、現在の縁葉川周辺である。地形Ｋは微高地群 11 と微高地群 12 に挟まれた低地部 14（吾蔓村中央部）で、低地部 14 は猿海道村にて低地部 13 と合流する。地形Ｌは微高地群 12 と微高地群 14 に挟まれた低地部 15（吾蔓村と平島村の村境付近から外嵜村北部に至る）で、現在の千間掘川周辺である。地形Ｉ～地形Ｌはそれぞれを構成する低地部 11・低地部 13・低地部 15 が微高地群９と微高地群 14 により南側を止められてい

ることから、地形Ｅと地形Ｆより古く形成された地形である。地形Ｍは微高地群 20（三ツ井村南部から伝法寺村中央部に至る）の西に展開する低地部 19（九日市場村東部付近）で、北側と南側は旧青木川により形成されたと考えられる微高地群 15 に塞がれる形となっていることから、地形Ｆより古く形成された地形であり、伝法寺本郷遺跡Ａ区にて検出された古代の自然河道 NR01 に対応する。地形Ｎは微高地群 21（伝法寺村南東部）と微高地群 22（五日市場村南東部）に挟まれた現在の五条川の地形であり、江戸時代後半期は「幼川」と呼ばれる河道であった。

（４）地籍図から想定される河道の変遷

（表１・図３）

先に分析した地形の形成過程から、その時期的変遷を考えたのが図３である。この中で低地部に古代の河道が存在し、形成された地形と考えられるのは、地形Ｆより古い地形で地形Ａ～地形Ｅ・地形Ｈ・地形Ｉ～地形Ｍがあり、地形Ｍは先に述べたように伝法寺本郷遺跡における発掘調査成果から９世紀頃までは存在した可能性が高く、地形Ｆは 10 世紀以後に形成された可能性が高い。また地形Ａは稲沢市内を蛇行する流路痕跡として確認できるもので、旧三宅川と考えられる低地部３の西側に位置する稲島村の東畑廃寺や国府宮村付近に想定される尾張国府推定地などから地形Ａには古代の重要な遺跡が多数立地しており（図５）、地形Ａに伴う低地部３に古代の三宅川が存在した可能性が高い。その後古代国家の展開とともに、旧三宅川の河道が変遷していった可能性が高く、現在の河道のある景観となるのは、大江川である宮田用水が設けられる 17 世紀前半が下限と考えられ（宮田用水普通水利組合 1944）、この際に地形Ｅに伴う低地部５が地形Ｆの形成に伴う改変を受けたものと想定できる。しかし、地形Ｆは下津村にみられる低地部９が河道として存在していたのは、下津北山遺跡の発掘調査成果から古墳時代前期前半頃から中世前半期までであ

表１　地籍図からみた地形分類

地形分類	西側・北側微高地群	低地部	東側・南側微高地群	備考
地形Ａ	微高地群１	低地部３（低地部１）	微高地群２（微高地群７）	旧三宅川
地形Ｂ	微高地群２	低地部６	微高地群６	
地形Ｃ	微高地群６	低地部７	微高地群８	
地形Ｄ	微高地群１	低地部４	微高地群２北側	
地形Ｅ	微高地群７	低地部５	微高地群９	
地形Ｆ	微高地群 14・微高地群８	低地部９・低地部８	微高地群 15・微高地群 16	現青木川から西に流れる下津北山遺跡中世河道
地形Ｇ	微高地群 18	現青木川下流部	微高地群 15	現青木川下流部
地形Ｈ	微高地群４	低地部２	微高地群５	
地形Ｉ	微高地群 10	低地部 11	微高地群 11	
地形Ｊ	微高地群 10～微高地群 12	低地部 13	微高地群 13	現緑葉川周辺
地形Ｋ	微高地群 11	低地部 14	微高地群 12	
地形Ｌ	微高地群 12	低地部 15	微高地群 14	現千間掘川周辺
地形Ｍ	微高地群 15	低地部 19	微高地群 20	伝法寺本郷遺跡Ａ区 NR01
地形Ｎ	微高地群 21	現五条川	微高地群 22	江戸時代の幼川・現五条川

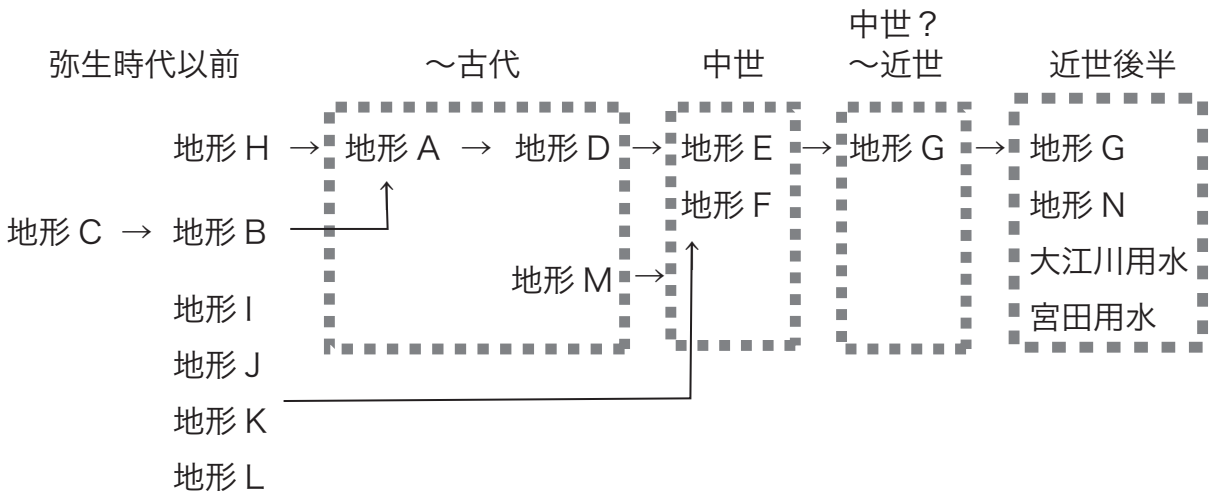


図３　地籍図からみた地形の変遷

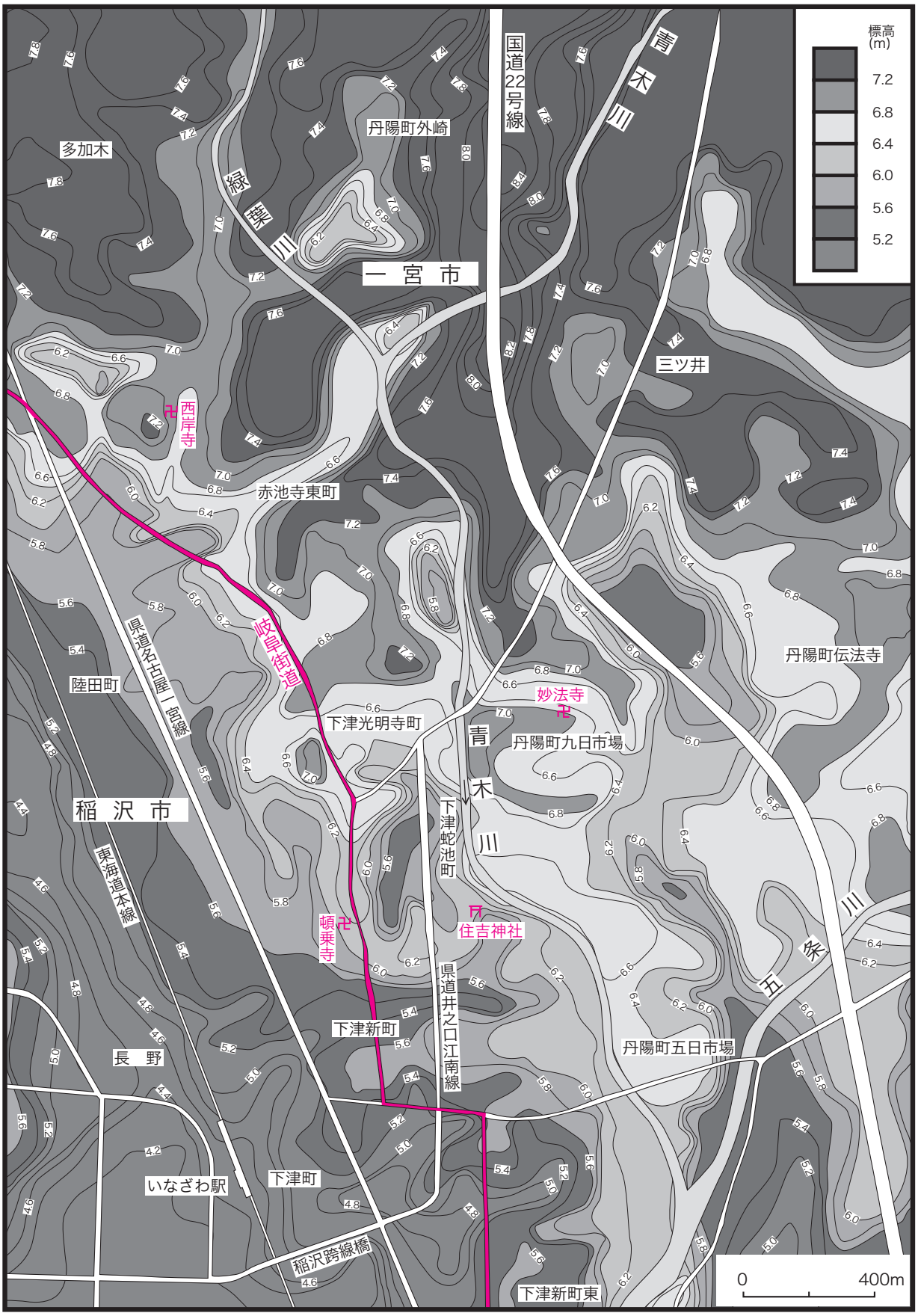


図4　愛知県稲沢市下津周辺の等高線図（都市計画図（1:2,500）を基に鬼頭が作成。）

り、15 世紀後半には湿地化して埋没していた可能性が高い。よって、地形Ｅと地形Ｆは 10 世紀から中世前半期において同時に存在し、形成された可能性が高く、旧三宅川と旧青木川の流路痕跡と考えられる低地部５と低地部９は赤池村北側付近にて合流していた可能性が高い。また地形Ｂ・地形Ｃ・地形Ｈ・地形Ｉ～地形Ｌは古代より古い時代に形成された可能性が高く、地形Ｇは先に述べたように地形Ｆと同時に形成された可能性はあるが、現代の景観に続く地形である。（蔭山誠一）

現在の表層地形解析

（１）方法

愛知県一宮市丹陽町から稲沢市下津町にかけて北から南へ流下する青木川の周辺における現在の表層地形解析のために等高線図を作成した。等高線図の作成には「一宮市都市計画基本図 (1/2,500)」、「稲沢市都市計画図 (1/2,500)」にプロットされた標高値を用いて鬼頭が作成した（図４）。

（２）表層地形の解析結果

東西約 2.8km、南北約 4.0km の範囲において、等高線間隔 0.2m で標高 4.2m から標高 8.4m までの等高線が描ける。さらに解析範囲全体の相対的な地形の高低差を読み取りやすくするために、等高線間隔 0.4m で７区分し図示した（図 3）。解析範囲の現在の状況について、図の中央に一宮市丹陽町外崎で北東から流下してくる青木川と、青木川の西に位置し北から流下してくる縁葉川が稲沢市赤池町付近で合流し、ひとつとなった流路は青木川となって南流する。稲沢市丹陽町五日市場付近で、青木川は北東から南西方向に流下してきた五条川と合流し、その後名称が五条川となって南流する。解析範囲の西には JR 東海道本線と稲沢駅が、東には国道 22 号線が通る。なお、図の北側、一宮市多加木から三ツ井にかけて東西方向に実際には名神高速道路と一宮インターチェンジが通るが、等高線図が読み取りにくくなるため省略している。

解析範囲全体では北側（一宮市丹陽町外崎・多加木）において標高 7.2m 以上で標高が高く、南西側（稲沢市下津町）に向かうにしたがって次第に低くなる。標高が高いところを解析範囲の北側から列記すれば、一宮市多加木から同市外崎、稲沢市赤池、一宮市三ツ井、一宮市丹陽町伝法寺にかけて標高 6.8m 以上のところがみられる。現在の青木川に沿う一宮市丹陽町九日市場にも標高 6.8m 以上で孤立した高まりがみられる。また、この丹陽町九日市場から青木川に沿って南へ下った丹陽町五日市場にかけて標高 6.0m から標高 6.6m までの標高の高い部分が連続する。

いっぽう、相対的に低いところは解析範囲の南西、稲沢市の JR 東海道本線に沿って標高 4.2m から標高 5.6m までに認められる。また、南東側の一宮市丹陽町五日市場でも標高 5.0m から標高 5.6m までが低い。

北ないし北東側から南や南西方向に開いた谷状の地形が認められる。解析範囲の北側、標高 5.8 ～ 7.6m の一宮市丹陽町外崎から稲沢市陸田町まで、縁葉川と青木川との合流地点を谷頭とする標高 5.8 ～ 6.8m の稲沢市赤池町付近、一宮市丹陽町外崎の国道 22 号線東側の現在の青木川の流路地点から南方向へ一宮市丹陽町三ツ井を通り一宮市丹陽町伝法寺、一宮市丹陽町五日市場の南東まで南北約３km にわたる、標高 5.0 ～ 7.4m の等高線で囲まれる部分が認められる。また、稲沢市下津新町から下津町でも標高 4.6 ～ 6.0m に東から西へ、あるいは北東から南西方向に開いた谷状地形がある。

閉曲線で囲まれた凹地地形もみられる。範囲の北側から列記すると一宮市丹陽町外崎に長軸約 600m で標高 6.2 ～ 7.2m の等高線で囲まれる範囲、稲沢市赤池町西方の長軸約 400m で標高 6.0 ～ 6.8m の範囲、稲沢市赤池町の東、一宮市丹陽町九日市場の北側の長軸約 300m で標高 5.8 ～ 6.6m の範囲、そこからさらに東側で一宮市丹陽町伝法寺との間に長軸約約 630m で標高 5.6 ～ 6.0m の範囲、稲沢市下津蛇池町の長軸約 500m で標高 5.6 ～ 6.0m の範囲の５つの凹地が認められる。

（３）地形解析結果からわかること

表層地形解析の結果から推定できる地形の特徴を挙げる。現在の解析範囲には北側で縁葉川と青木川が、南側では北東から南西方向へ五条川が流下しているが、表層地形解析にあらわれ

る結果は現在の流路とはほとんど調和していないことである。相対的に位置エネルギーの低い場所を選んで流下する河川流路の場合は流路がもっとも標高が低くなり、流路に直行してしだいに標高を増していく。また、流路に並行して等高線は描画される。対して、天井川化した河川流路の場合には、流路部分の位置エネルギーが高くなるため等高線の配置は逆になり、流路に直行して等高線を減ずると予想される。ところが、解析範囲を流下する縁葉川・青木川・五条川には等高線に並行にのびるような等高線が認められない。解析範囲の北側、一宮市多加木の縁葉川沿いの標高 7.0m 以上、あるいは一宮市外崎東側の青木川沿いの標高 7.4m 以上にわずかに流路に並行な等高線が認められるだけである。このように表層にあらわれる地形と現在の河川の流路とが調和しない場合、現在の河川流路はかつての古地形を開析して流れるような形成年代がより新しいことが指摘できる。

開析範囲でもっとも明瞭にあらわれるのは現在の青木川流路の東側、一宮市丹陽町三ツ井から一宮市丹陽町五日市場までに認められる標高 5.0 ～ 7.4m までの南北方向にのびる谷状の地形である。この谷状地形の中には一宮市丹陽町伝法寺付近に標高 5.6 ～ 6.0m の閉曲線で囲まれる凹地がみられたり、一宮市丹陽町外崎の東では現在の青木川に並行して等高線が描ける。これらの特徴から推定すると、谷状の地形はかつての河川流路跡であると思われる。また、他の地域でみられる谷状の地形も閉曲線で囲まれる凹地地形を地形要素としてもっており、例えば現在の青木川と縁葉川とが合流する稲沢市赤池町付近にも、合流地点において標高 6.4m ～ 6.6m の凹地が認められる。それらも時代は不明であるが、かつての河川流路の跡、つまり放棄河道であると推定できる。

さて、ここで青木川の流路沿いに注目してみる。青木川は周囲に比べて流路に沿って地形が高い部分にあたっていることがわかる。特に一宮市丹陽町九日市場では標高 6.8 ～ 7.0m の閉曲線で囲まれ孤立丘状に高くなっている。一宮市丹陽町九日市場から青木川の流路に沿って南方向の一宮市丹陽町五日市場にかけても、まわりよりも高くなっている。該当範囲での地質学的なデータを得ていないが、この高い部分は全体に南北方向に連続し、先にのべた標高 5.0 ～ 7.4m までで南北方向にのびる谷状地形をつくった旧河川に関連する自然堤防ととらえることもできる。

上記の相対的に高い部分に対して、青木川の東側にみられる低い地形を検討すると、一宮市丹陽町九日市場でみられる標高 6.8 ～ 7.0m の高い部分の北側に標高 5.8 ～ 6.6m の凹地地形がみられた。この凹地地形は等高線により先の標高 5.0 ～ 7.4m までにみられた大きな谷状地形につながる。2008 年 1 月 5 日の我々の調査でも一宮市丹陽町九日市場の北側に軽微な凹地地形を認めている。かつて一宮市丹陽町九日市場を通って標高 5.0 ～ 7.4m の大きな谷状地形に合流する河川流路があったかもしれない。また、稲沢市下津蛇池町の標高 5.6 ～ 6.0m の閉曲線で囲まれる部分も、一宮市丹陽町九日市場の北側にみられた標高 5.8 ～ 6.6m の凹地地形から稲沢市下津蛇池町を通って流下していた河川流路の放棄河道部分にあたる可能性が指摘される。

以上をまとめると、次のことがわかる。

1. 標高 4.2 ～ 8.4m までの解析範囲全体では北側の一宮市多加木・外崎で相対的に地形が高く、南西の稲沢市では JR 東海道本線に沿って低い。
2. 現在解析範囲を流れる縁葉川、青木川、五条川の流路は、現在みられる表層地形とは非調和的であり、周りでみられる地形の形成時期に比べて新しいものと思われる。
3. 一宮市丹陽町三ツ井を通り一宮市丹陽町伝法寺、一宮市丹陽町五日市場まで標高 5.0 ～ 7.4m の南北距離約 3km の谷状地形や稲沢市赤池町付近でも標高 5.8m ～ 7.4m の谷状地形がみられ、河道跡と推定される。
4. 解析範囲には閉曲線で囲まれる 5 つの凹地がみられ、それらは地形等高線から読み取れる谷状地形に伴われる。
5. 一宮市丹陽町九日市場から一宮市丹陽町五日市場までは標高が高く、それは南北方向に連続する。
6. 一宮市丹陽町九日市場の北側にみられる凹地地形から推定して、一宮市丹陽町三ツ井、同丹陽町伝法寺、同丹陽町五日市場にかけての標高

5.0 ～ 7.4m の谷状地形につながる北西から南西方向に流下して合流していた可能性がある。また、先の一宮市丹陽町九日市場の北側から稲沢市蛇池町にいたる河川流路の存在も推定される。（鬼頭 剛）

中世下津に関する考古学的調査

（1）古代から中世の遺跡分布（図５・表２）

次に考古学的な調査の概要について報告する。

今回分析の対象とした地域（稲沢市と一宮市）でこれまでに確認された周知の遺跡は『愛知県遺跡分布地図』によると、一宮市域で 14 ヶ所、稲沢市域で 74 ヶ所が存在する。その中で古墳時代から近世の遺跡を表示したものが図５で、遺跡名を表示したものが表２である。遺跡の分布にあまり偏りは見られないが、古代の遺跡にはほとんど中世の遺跡も重複して形成された状況がみられ、近世以後の村落形成につながってくる様子が窺われる。その中で、稲沢市域では国府宮地域にある尾張国府跡と東畑廃寺を中心に古代の布目瓦が出土する遺跡が６ヶ所（高須賀遺跡・八龍社遺跡・天神前遺跡・治郎丸元屋敷遺跡・清敷遺跡・古海道遺跡）みられ、尾張国府跡は中世以後も地域の拠点集落であったことが発掘調査によって確認されている。稲沢市下津地域では、古代から遺跡形成がみられるが、後に紹介する北丹波・東流遺跡において布目瓦・緑釉陶器・土馬などがみつかっており、下津地域においても古代の拠点集落の形成が想定される。一宮市丹陽町伝法寺では伝法寺廃寺を中心に布目瓦等がみつかる古代寺院が想定されており、中世以後も遺跡が営まれることが発掘調査において確認されている。また、一宮市丹陽町伝法寺と同九日市場と同五日市場においても須恵器、灰釉陶器、灰釉系陶器、古瀬戸施釉陶器等が地表面上において採集できる地点が 20 箇所（図５の表面採集地点ａ～ｔ、表３）あり、遺跡の存在が予測される。

（2）中世における発掘調査成果

（図５・表４- １・表４- ２）

ここでは、発掘調査が行われ、報告書等が公表された遺跡の調査成果について、確認された遺構の種類と出土遺物の時期別出土傾向をまとめた（表４- １・表４- ２）。この一覧は遺跡の有無確認調査や範囲確認調査、発掘の本調査まで実施されたものを含むので同一の基準でみることはできないが、中世の遺跡調査で確認できる遺物は灰釉系陶器がほとんどの遺跡（出土遺

表２　下津周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
1	重吉城跡	古墳・平安～鎌倉	45	子生和山王遺跡	中世
2	東高龍遺跡	奈良～平安	46	子生和八島遺跡	中世
3	飛所遺跡	奈良～平安	47	子安賀遺跡	中世
4	茂八杁遺跡	弥生～平安	48	島寺西遺跡	中世
5	六所遺跡	弥生～平安	49	陸田城跡	中世
6	池の上遺跡	縄文後期・古墳・鎌倉	50	子生和坂田遺跡	中世
7	稲荷山古墳	古墳	51	治郎丸神木遺跡	中世
8	伝法寺廃寺	奈良～中世	52	北山ノ内遺跡	中世
9	西大門遺跡	弥生～平安	53	陸田馬山遺跡	古代～中世
10	五輪ヶ淵遺跡	奈良～室町	54	治郎丸元屋敷遺跡	古代
11	仏供田遺跡	平安	55	平助前遺跡	中世
12	氏永畑遺跡	平安	56	長野北浦遺跡	古墳～江戸
13	四文宮遺跡	平安	57	追取遺跡	中世
14	妙興寺跡・妙興寺境内地遺跡	奈良・室町～	58	正明寺花池遺跡	中世
15	鎌倉街道周辺遺跡	古墳～江戸	59	天之越遺跡	古代～中世
16	下津遺跡	縄文～江戸	60	普照堂遺跡	中世
17	子生和遺跡	古墳～中世	61	醒ケ井遺跡	中世
18	北流田遺跡	古墳～中世	62	地蔵寺東遺跡	中世
19	清敷遺跡	古代	63	正明寺市場遺跡	中世
20	治郎丸土井遺跡	古墳～中世	64	上間遺跡	中世
21	天神前遺跡	古墳～中世	65	中曽根遺跡	弥生～近世
22	塔の越遺跡	古墳～中世	66	長束鳥居先遺跡	古墳～中世
23	高須賀遺跡	奈良～平安	67	古海道遺跡	古代～近世
24	東畑廃寺跡	白鳳～中世	68	蓮池遺跡	古墳～近世
25	尾張国府跡	古墳～江戸	69	町長遺跡	古代～近世
26	北丹波・東流遺跡	古墳～中世	70	松葉添遺跡	古代～中世
27	ハサバ遺跡	古墳～近世	71	大宮廻遺跡	古代～中世
28	長束正家館跡	安土桃山	72	大塚東屋敷遺跡	古代～近世
29	高御堂遺跡	古墳～中世	73	五万出遺跡	弥生～近世
30	大塚遺跡	弥生～近世	74	大宮・北畑遺跡	古墳～中世
31	下津新町遺跡	奈良～江戸	75	八軒屋遺跡	中世
32	駅前神明社遺跡	古墳	76	西屋敷遺跡	中世
33	シノギ遺跡	中世	77	四ツ家遺跡	中世
34	浅野長勝邸跡	安土桃山	78	日下部・六角堂遺跡	古代～中世
35	赤池真崎遺跡	古代～近世	79	北喜路宇遺跡	古代～中世
36	赤池西出遺跡	古代～中世	80	天目寺遺跡	古代～中世
37	赤池前山遺跡	中世～近世	81	長角・大門遺跡	古代～中世
38	陸田白山遺跡	弥生～中世	82	神ノ木遺跡	中世
39	赤池壱里山遺跡	古代～近世	83	寺跡遺跡	近世
40	陸田東出遺跡	古代～中世	84	赤池一里塚跡	江戸
41	下津長田遺跡	古代～中世	85	四ツ家一里塚遺跡	江戸
42	陸田宮前遺跡	中世	86	上石田遺跡	近世
43	下津小井戸遺跡	古代～近世	87	西細廻遺跡	近世
44	下津北山遺跡	古代～中世	88	長束北浦遺跡	近世

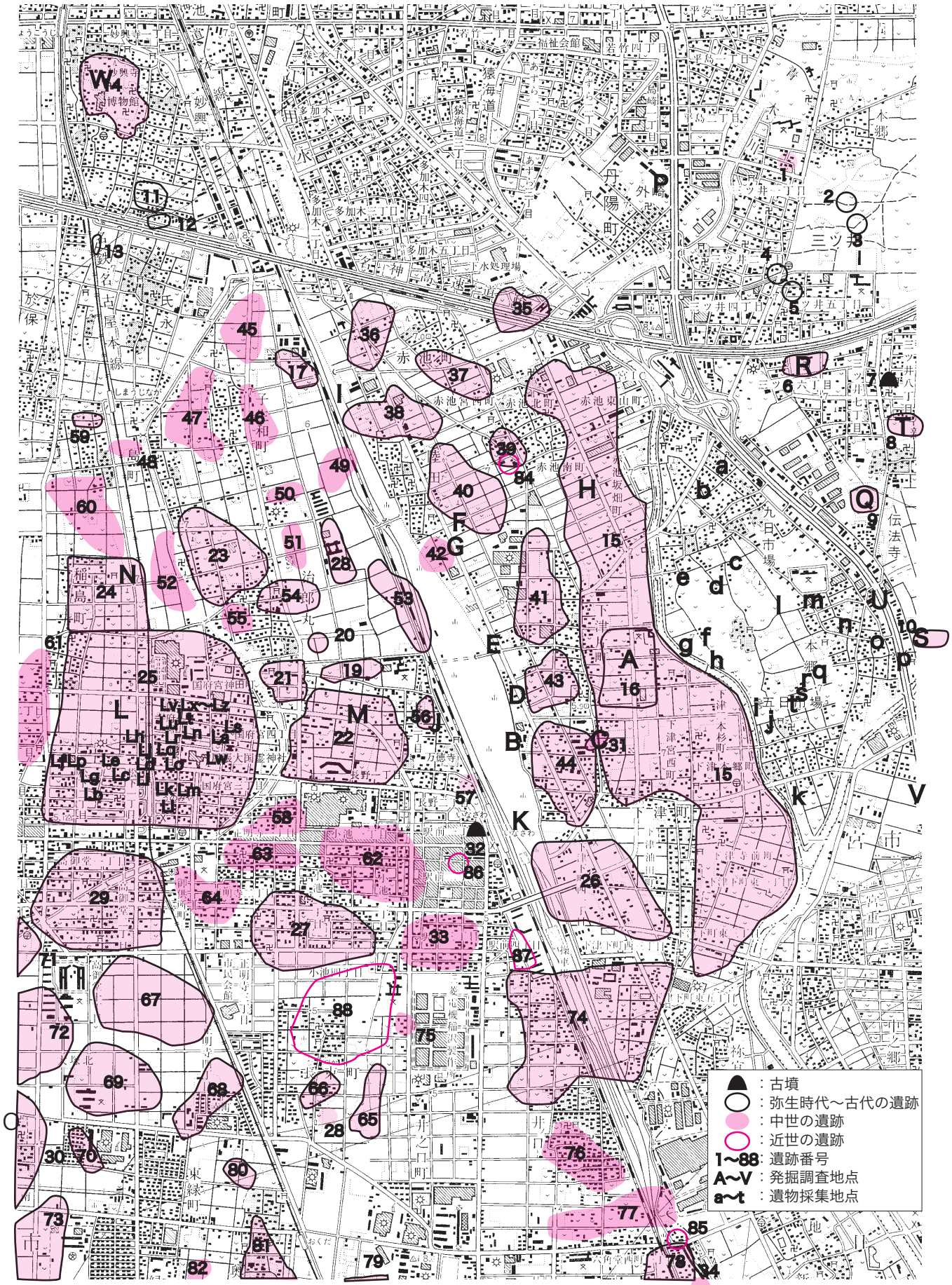


図５　下津周辺の遺跡及び、発掘調査地点と遺物表面採集地点（1:25,000、国土地理院発行地形図 25,000 分の１「清洲・一宮」を改変）

表３　表採遺物の一覧（地点番号は図５の遺物表面採集地点と対応する）

地点	住所	地点詳細	表採遺物
a	一宮市丹陽町九日市場	エネオスG.S.北西畑地	北部系灰釉系陶器椀1点、小皿1点
b	一宮市丹陽町九日市場	妙法寺北東畑地	南部系灰釉系陶器椀1点、北部系灰釉系陶器椀1点、小皿2点
c	一宮市丹陽町九日市場	庚申塚北東畑地	北部系灰釉系陶器椀2点、小皿1点
d	一宮市丹陽町九日市場	青木川東岸畑地	南部系灰釉系陶器椀1点、北部系灰釉系陶器椀1点
e	一宮市丹陽町九日市場	九日市場西集落南畑地	南部系灰釉系陶器椀1点、北部系灰釉系陶器椀1点、小皿2点
f	一宮市丹陽町九日市場	青木川東岸畑地	灰釉陶器壺2点、北部系灰釉系陶器小皿1点
g	一宮市丹陽町九日市場	青木川東岸畑地	北部系灰釉系陶器椀4点、小皿1点、土師器小皿4点、鉄釉擂鉢転用加工円板1点
h	一宮市丹陽町九日市場	青木川東岸畑地	北部系灰釉系陶器椀1点、土師器小皿1点
l	一宮市丹陽町五日市場	剣神社北西、青木川東岸畑地	北部系灰釉系陶器椀4点、羽釜形土師器1点
j	一宮市丹陽町五日市場	青木川東岸、法正寺西畑地	須恵器1点、北部系灰釉系陶器椀2点、土師器皿1点
k	一宮市丹陽町五日市場	行人橋南、青木川東岸畑地	土師器椀1点、南部系灰釉系陶器小皿1点、北部系灰釉系陶器椀1点、小皿4点
l	一宮市丹陽町九日市場	丹陽南保育園西水田	須恵器壺1点、南部系灰釉系陶器擂鉢1点、北部系灰釉系陶器椀1点
m	一宮市丹陽町伝法寺	丹陽南保育園南畑地	北部系灰釉系陶器椀2点、土師器片1点
n	一宮市丹陽町伝法寺	水道工事現場4860番地北付近	北部系灰釉系陶器椀2点、土師器皿1点
o	一宮市丹陽町伝法寺	道路工事脇宅地境	近世志野釉小皿1点
p	一宮市丹陽町伝法寺	六所神社境内	緑釉型押土人形1点
q	一宮市丹陽町五日市場	用水西隣畑地	南部系灰釉系陶器椀2点、北部系灰釉系陶器椀1点、小皿1点
r	一宮市丹陽町五日市場	用水西畑地	北部系灰釉系陶器椀1点、小皿3点
s	一宮市丹陽町五日市場	神明社跡地北畑地	北部系灰釉系陶器椀5点、鉄釉天目茶椀1点、鉄釉壺1点
t	一宮市丹陽町五日市場	神明社跡地西	土師器片1点

物がある程度判明する遺跡調査の約86％）で確認できるが、古瀬戸様式の施釉陶器は半分程の調査（同じく約48％）で、大窯様式（1型式・2型式）の施釉陶器は確認例が少なくなる（同じく約28％）。

次に確認された遺構の種類の傾向を見ると、中世集落の居住域が想定される掘立柱建物が検出されているのは、下津北山遺跡・下津新町遺跡・尾張国府跡・島崎遺跡があり、井戸が確認されているのは下津城跡・下津北山遺跡・下津新町遺跡・長野北浦遺跡・尾張国府跡・塔の越遺跡・島崎遺跡・西大門遺跡・飯守神遺跡・伝法寺廃寺跡・三ツ井遺跡がある。中世の館の可能性のある溝や方形地割りの溝が確認されている遺跡は、下津城跡・下津北山遺跡・下津新町遺跡・下津東出遺跡・長野北浦遺跡・大塚遺跡・尾張国府跡・塔の越遺跡・東畑廃寺跡・伝法寺廃寺跡・妙興寺境内地遺跡がある。中世の用水路・排水路や用途が確定できない水路・溝の巡りが不明な溝が確認されている遺跡は下津城跡・下津北山遺跡・下津新町遺跡・下津東出遺跡・鎌倉街道周辺遺跡赤池広畑町地点・陸田白山遺跡・長野北浦遺跡・大塚遺跡・尾張国府跡・塔の越遺跡・東畑廃寺跡・島崎遺跡・西大門遺跡・飯守神遺跡・五輪ヶ淵遺跡・伝法寺廃寺跡・伝法寺本郷遺跡・妙興寺境内地遺跡・伝法寺野田遺跡・三ツ井遺跡・権現山遺跡がある。墓域が想定される土坑等が確認されている遺跡は、島崎遺跡・権現山遺跡があり、生産遺構として中世の水田跡が確認されている遺跡は長野北浦遺跡・伝法寺野田遺跡、島畑遺構が想定されている遺跡は三ツ井遺跡がある。本論に関係のある下津関連の遺跡では緑釉円塔（尾張国府跡においても出土している）や墨書の記述から12世紀後半の寺院の可能性が指摘されている下津北山遺跡、やや細長い方形小区画が確認される15世紀前半の下津新町遺跡、幅5mを超える方形区画溝がみられる下津城跡は下津の中心居館が想定され、貴重な調査成果である。また、下津の西にある鎌倉時代の寺院である万徳寺の北を調査した長野北浦遺跡では鎌倉時代に方形の区画溝が掘削され、その後14世紀後半～15世紀にかけて溝が埋められて居住域が展開する状況が確認されている。これら下津関連の遺跡における遺構・遺物は12世紀後半から15世紀後半にかけて連綿と営まれている状況がみられ、下津宿（守護所）との関係が想定されるものである。また下津にあった守護所が消滅した後も、下津城跡では16世紀前半までの資料が、後に述べる青木川出土資料では17世紀前半までの遺物が多数確認されている。

その他の資料では下津住吉町出土とされる陰刻がある石硯が確認されており（日野1987）、墨書に書かれた記述から付近にあった「頓乗寺」との関連が指摘できる。

（3）原米吉氏採集資料

今回分析する稲沢市下津地域において昭和40年代に原米吉氏により採集された資料が2つある。1つは稲沢市下津森町の字北丹波から東流に所在する北丹波・東流遺跡で、昭和43年の国鉄東海道線稲沢駅南の陸橋工事の際に採集され、昭和56年11月の発掘調査により得られた資料で、『新修稲沢市史』資料編六考古に「北丹波　東流遺跡」として報告されている。発掘調査では古代のものと思われる溝が2条確認できる。もう1つは昭和46年から47年にかけて

表４-1　下津周辺の発掘調査（遺跡番号は図５の発掘調査地点と対応する）

遺跡番号	遺跡名	遺構												遺物														報告書等
		掘立柱建物	礎石建物	竪穴状遺構	井戸	溝（方形地割）	溝（館）	水田	墓（土葬）	墓（火葬）	火葬施設	その他	山茶椀第3型式	山茶椀第4型式	山茶椀第5型式	山茶椀第6型式	山茶椀第7型式	山茶椀第8型式	山茶椀第9型式	山茶椀第10型式	山茶椀第11型式	古瀬戸前期	古瀬戸中期	古瀬戸後期	大窯1型式	大窯2型式	その他	
A	下津城跡				○		○	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	卒塔婆・漆椀	井口喜晴1984「下津城跡」『新修稲沢市史　資料編六　考古』稲沢市
A	下津城跡							○											○									日野幸治1985「下津城跡緊急発掘調査報告書」『稲沢市文化財調査報告XXIV』東海農政局・稲沢市教育委員会
A	下津城跡						○																					日野幸治1985『下津城跡発掘調査概要報告書(I)』稲沢市教育委員会
A	下津城跡						○	○				土坑			○	○								○	○	○	銅銭・鉄滓	日野幸治1986『下津城跡発掘調査概要報告書(II)』稲沢市教育委員会
A	下津城跡						○	○				土坑															銅銭	北條献示・日野幸治・愛甲昇寛1987「下津城跡発掘調査報告書(III)」『稲沢市文化財調査報告XXIX』稲沢市教育委員会
A	下津城跡						○																					北條献示・日野幸治・愛甲昇寛1988「下津城跡発掘調査報告書(IV)」『稲沢市文化財調査報告XXXI』稲沢市教育委員会
A	下津城跡							○				土坑			○									○	○			北條献示2003『下津公民館用地埋蔵文化財発掘調査報告書―下津城跡・下津城跡下層遺跡―』稲沢市教育委員会・稲沢市内遺跡発掘調査委員会
B	下津北山遺跡														○	○								○				北條献示・日野幸治1996「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(II)」『稲沢市文化財調査報告XLIV』稲沢市教育委員会
B	下津北山遺跡														○	○	○	○					○	○		○		北條献示1999「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(V)」『稲沢市文化財調査報告XLVII』稲沢市教育委員会
B	下津北山遺跡	○			○	○	○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			泥塔・鍛冶	早野浩二編2000「下津北山遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第88集』財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
B	下津北山遺跡							○				土坑			○	○	○						○					北條献示2001『下津北山遺跡発掘調査報告書(I)』都市基盤整備公団中部支社・稲沢市内遺跡発掘調査委員会
B	下津北山遺跡					○	○	○				土坑			○	○		○				○						北條献示2002『下津陸田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』稲沢市都市開発部・稲沢市内遺跡発掘調査委員会
B	下津北山遺跡					○	○	○				土坑			○	○		○	○				○		○			北條献示2004『下津北山遺跡発掘調査報告書(II)』都市基盤整備公団中部支社・稲沢市内遺跡発掘調査委員会
c	下津新町遺跡	○			○	○	○	○				土坑			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		鈴木正貴編2009「下津新町遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第159集』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
D	下津小井戸遺跡																							○				北條献示1999「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(V)」『稲沢市文化財調査報告XLVII』稲沢市教育委員会
E	下津長田遺跡															○		○								○		北條献示1999「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(V)」『稲沢市文化財調査報告XLVII』稲沢市教育委員会
F	陸田東出遺跡													○										○		○		北條献示1999「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(V)」『稲沢市文化財調査報告XLVII』稲沢市教育委員会
F	陸田東出遺跡					○		○				土坑				○	○	○	○		○	○	○	○	○		銅銭	北條献示2002『下津陸田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』稲沢市都市開発部・稲沢市内遺跡発掘調査委員会
F	陸田東出遺跡											遺構なし															遺物なし	北條献示2002「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(VI)」『稲沢市文化財調査報告XLVIII』稲沢市教育委員会
G	陸田宮前遺跡																									○		北條献示・日野幸治1996「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(II)」『稲沢市文化財調査報告XLIV』稲沢市教育委員会
G	陸田宮前遺跡																	○								○		北條献示1999「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(V)」『稲沢市文化財調査報告XLVII』稲沢市教育委員会
H	鎌倉街道周辺遺跡(赤池広畑町)						○										○											北條献示2002「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(VI)」『稲沢市文化財調査報告XLVIII』稲沢市教育委員会
I	陸田白山遺跡																											日野幸治1991「旧国鉄操車場跡地内試掘調査報告(I)」『稲沢市文化財調査報告XXXVII』稲沢市教育委員会
I	陸田白山遺跡						○							○		○	○											北條献示2005『陸田白山遺跡発掘調査報告書』稲沢市土地開発公社・稲沢市内遺跡発掘調査委員会
J	長野北浦遺跡				○	○		○	○			畝溝・土坑			○	○	○	○	○	○	○							樋上昇2008「長野北浦遺跡」『年報平成19年度』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター・蔭山誠一2009「長野北浦遺跡」『年報平成20年度』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
K	北丹波・東流遺跡															○								○				日野幸治1992「旧国鉄操車場跡地内試掘調査報告(II)」『稲沢市文化財調査報告XXXIX』稲沢市教育委員会
K	北丹波・東流遺跡																											日野幸治1994「旧国鉄操車場跡地内試掘調査報告(III)」『稲沢市文化財調査報告XLII』稲沢市教育委員会
L	尾張国府跡						○					土坑	○	○		○	○		○	○				○			銅銭・鉄滓	北條献示・柴垣勇夫・岩野見司1979「尾張国府跡発掘調査報告書(I)」『稲沢市文化財調査報告IV』稲沢市教育委員会
L	尾張国府跡						○					土坑・大甕		○	○		○	○	○	○				○			緑釉円塔・銅銭・鉄滓	北條献示・岩野見司1980「尾張国府跡発掘調査報告書(II)」『稲沢市文化財調査報告IX』稲沢市教育委員会
L	尾張国府跡				○							鍛冶遺構						○						○		○	鉄滓	北條献示・日野幸治1981「尾張国府跡緊急発掘調査報告書」『稲沢市文化財調査報告XIII』稲沢市教育委員会
L	尾張国府跡	○					○							○	○	○	○										銅銭・鉄滓	北條献示・岩野見司1981「尾張国府跡発掘調査報告書(III)」『稲沢市文化財調査報告XI』稲沢市教育委員会
L	尾張国府跡				○		○							○	○	○	○		○								銅銭	北條献示・日野幸治1982「尾張国府跡発掘調査報告書(IV)」『稲沢市文化財調査報告XV』稲沢市教育委員会
L	尾張国府跡						○				○	柵・土坑	○	○	○	○	○	○									銅印・銅銭・鉄滓	北條献示・日野幸治1983「尾張国府跡発掘調査報告書(V)」『稲沢市文化財調査報告XVIII』稲沢市教育委員会

表４-2　下津周辺の発掘調査（遺跡番号は図５の発掘調査地点と対応する）

遺跡番号	遺跡名	遺構												遺物														報告書等
		掘立柱建物	礎石建物	竪穴状遺構	井戸	溝（方形地割）	溝（館）	溝（他）	水田	墓（土葬）	墓（火葬）	火葬施設	その他	山茶椀第3型式	山茶椀第4型式	山茶椀第5型式	山茶椀第6型式	山茶椀第7型式	山茶椀第8型式	山茶椀第9型式	山茶椀第10型式	山茶椀第11型式	古瀬戸前期	古瀬戸中期	古瀬戸後期	大窯1型式	大窯2型式	その他	
L	尾張国府跡	○						○							○	○	○	○		○	○				○	○	○	緑釉円塔・銅印・鉄滓	日野幸治1984「尾張国府跡発掘調査報告書(VI)」『稲沢市文化財調査報告XX』稲沢市教育委員会
L	尾張国府跡	○				○		○					土坑		○	○				○	○				○	○		緑釉円塔	日野幸治1985「尾張国府跡発掘調査報告書(VII)」『稲沢市文化財調査報告XXIII』稲沢市教育委員会
L	尾張国府跡														○	○	○			○					○	○			北條献示・日野幸治1986「尾張国府跡発掘調査報告書(VIII)」『稲沢市文化財調査報告XXVII』稲沢市教育委員会
L	尾張国府跡							○							○			○											北條献示・日野幸治1987「尾張国府跡発掘調査報告書(IX)」『稲沢市文化財調査報告XXX』稲沢市教育委員会
L	尾張国府跡														○	○		○											日野幸治1988「尾張国府跡発掘調査報告書(X)」『稲沢市文化財調査報告XXXII』稲沢市教育委員会
L	尾張国府跡							○					土坑		○	○						○			○				日野幸治1989『尾張大国霊神社境内緊急発掘調査報告書』尾張大国霊神社境内緊急発掘調査団
L	尾張国府跡							○							○	○	○		○	○	○		○	○				緑釉円塔	北條献示・日野幸治1989「尾張国府跡発掘調査報告書(XI)」『稲沢市文化財調査報告XXXIV』稲沢市教育委員会
M	塔の越遺跡																												岩野見司・北條献示1980「塔の越遺跡発掘調査報告書」『稲沢市文化財調査報告VIII』稲沢市教育委員会
M	塔の越遺跡					○																			○	○			日野幸治1986「塔の越遺跡発掘調査概要報告書」『稲沢市文化財調査報告XXVIII』稲沢市教育委員会・日野幸治1988『塔の越遺跡発掘調査報告書(II)』塔の越遺跡発掘調査団・株式会社アクト
M	塔の越遺跡				○	○		○						○	○	○													早野浩二2008「塔の越遺跡」『年報平成19年度』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター・鵜飼雅弘2009「塔の越遺跡」『年報平成20年度』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
N	東畑廃寺跡															○													岩野見司・北條献示1980「東畑廃寺跡発掘調査報告書」『稲沢市文化財調査報告VI』稲沢市教育委員会
N	東畑廃寺跡													○				○											北條献示1990「東畑廃寺跡発掘調査報告書(II)」『稲沢市文化財調査報告XXXV』稲沢市教育委員会
N	東畑廃寺跡							○					土坑			○													北條献示1991「東畑廃寺跡発掘調査報告書(III)」『稲沢市文化財調査報告XXXVI』稲沢市教育委員会
N	東畑廃寺跡					○		○					土坑				○	○	○										北條献示1992「東畑廃寺跡発掘調査報告書(IV)」『稲沢市文化財調査報告XXXVIII』稲沢市教育委員会
N	東畑廃寺跡							○					土坑			○	○	○	○	○									北條献示1993「東畑廃寺跡発掘調査報告書(V)」『稲沢市文化財調査報告XL』稲沢市教育委員会
N	東畑廃寺跡							○					土坑				○	○	○										北條献示1994「東畑廃寺跡発掘調査報告書(VI)」『稲沢市文化財調査報告XLI』稲沢市教育委員会
N	東畑廃寺跡							○					土坑		○	○		○											北條献示1995「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(I)」『稲沢市文化財調査報告XLIII』稲沢市教育委員会
N	東畑廃寺跡																												北條献示・日野幸治1996「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(II)」『稲沢市文化財調査報告XLIV』稲沢市教育委員会
O	大塚遺跡															○	○						○						日野幸治・北條献示1983「大塚古墳範囲確認調査報告(I)」『稲沢市文化財調査報告XVII』稲沢市教育委員会・日野幸治・佐々木悟1984「大塚古墳範囲確認調査報告(II)」『稲沢市文化財調査報告XXI』稲沢市教育委員会
O	大塚遺跡					○		○					土坑			○	○												北條献示2002「稲沢市内遺跡発掘調査報告書(VI)」『稲沢市文化財調査報告XLVIII』稲沢市教育委員会・北條献示2004『大塚遺跡発掘調査報告書』稲沢市都市開発部・稲沢市内遺跡発掘調査委員会
P	島崎遺跡	○			○			○		○			土坑				○	○	○	○	○								早野浩二・宮腰健司他2006「島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第139集』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
Q	西大門遺跡				○			○							○	○	○												土本典生2002「西大門遺跡・飯守神遺跡・五輪ヶ淵遺跡発掘調査報告書」『一宮市埋蔵文化財調査報告III』一宮市教育委員会
R	飯守神遺跡				○			○						○	○														土本典生2002「西大門遺跡・飯守神遺跡・五輪ヶ淵遺跡発掘調査報告書」『一宮市埋蔵文化財調査報告III』一宮市教育委員会
S	五輪ヶ淵遺跡							○						○	○	○	○							○					土本典生2002「西大門遺跡・飯守神遺跡・五輪ヶ淵遺跡発掘調査報告書」『一宮市埋蔵文化財調査報告III』一宮市教育委員会
T	伝法寺廃寺跡			○	○		○							○	○	○	○	○	○	○	○			○					土本典生2006「伝法寺廃寺発掘調査報告書」『一宮市埋蔵文化財調査報告V』一宮市教育委員会
U	伝法寺本郷遺跡							○							○	○	○	○	○	○	○	○	○						早野浩二・宮腰健司他2006「島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第139集』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
V	宇福寺遺跡												古墳時代以後の自然河道																早野浩二・宮腰健司他2006「島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第139集』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
W	妙興寺境内地遺跡						○						妙興寺の堀																土本典生1986「妙興寺境内地遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報1』愛知県教育委員会・財団法人愛知県埋蔵文化財センター
W	妙興寺境内地遺跡							○																					土本典生1990「妙興寺境内地遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報5』愛知県教育委員会・財団法人愛知県埋蔵文化財センター
	伝法寺野田遺跡							○						○	○	○	○			○	○			○					川添和暁編2007「伝法寺野田遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第141集』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
	伝法寺野田遺跡							○	○							○	○				○	○							蔭山誠一2007「伝法寺野田遺跡」『年報平成18年度』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
	三ツ井遺跡				○			○	○				島畑関連遺構		○	○	○	○	○	○	○	○			○	○			田中伸明編1999「三ツ井遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集』愛知県埋蔵文化財センター
	権現山遺跡							○		○			墓域			○	○												早野浩二編2003「権現山遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

行われた青木川の河川改修工事の際に、稲沢市下津本郷町に所在する五下橋と行人橋の間にある川原にて採集された資料群で、原氏の記録によれば、当時の行人橋の北にある青木川の西河原から西側堤防の下にて、住居跡、井戸跡、遺物包含層等が確認されている（写真1）。この資料も『新修稲沢市史』資料編六考古にて「青木川付近採集遺物」として報告されている。他にも原米吉氏資料は稲沢市教育委員会により1983年に刊行された『稲沢市考古資料図録 -原米吉氏収集資料 -』として紹介されているものなどがある。今回は主に稲沢市教育委員会と一宮市博物館に寄贈された原氏採集資料の中から、稲沢市史に紹介されている遺物の観察とその他遺跡の理解に必要と思われる遺物の一部を実測し、紹介する。

（A）北丹波・東流遺跡採集資料（図６）

７世紀から９世紀にかけての資料がある。１～９と12は須恵器で、１は７世紀の須恵器杯身で、漆とされる有機物の付着が見られる。２～５と７は杯身で３が皿形、２と４が椀形のものである。５と７は高台付きのもの、６は杯蓋である。８は甕、９は長頸壺、12が風字硯である。10は灰釉陶器の把手付壺で、11は土馬の頭部片である。

７世紀後半から９世紀前半にかけての遺物群であり、９の長頸壺は静岡地域からの招来品であり、11の土馬の存在は水に関わる祭祀遺跡である可能性がある。今回の地籍図の分析からは地形Ｆに先行する微高地群17（下津村南部中央）に立地する遺跡であり、古代にさかのぼる遺跡群が下津新町遺跡から南に展開する可能性が高い。

（B）青木川付近採集資料（図７）

平安時代から江戸時代にかけての資料がある。１～３は灰釉陶器で、１が段皿で内面に花文があるもの、２が小椀、３が直口壺である。４～15が古瀬戸様式の灰釉陶器で、４が把手と注口が付く水注、５・６が椀、７・８がおろし皿、９～14が皿、15が甕皿である。５

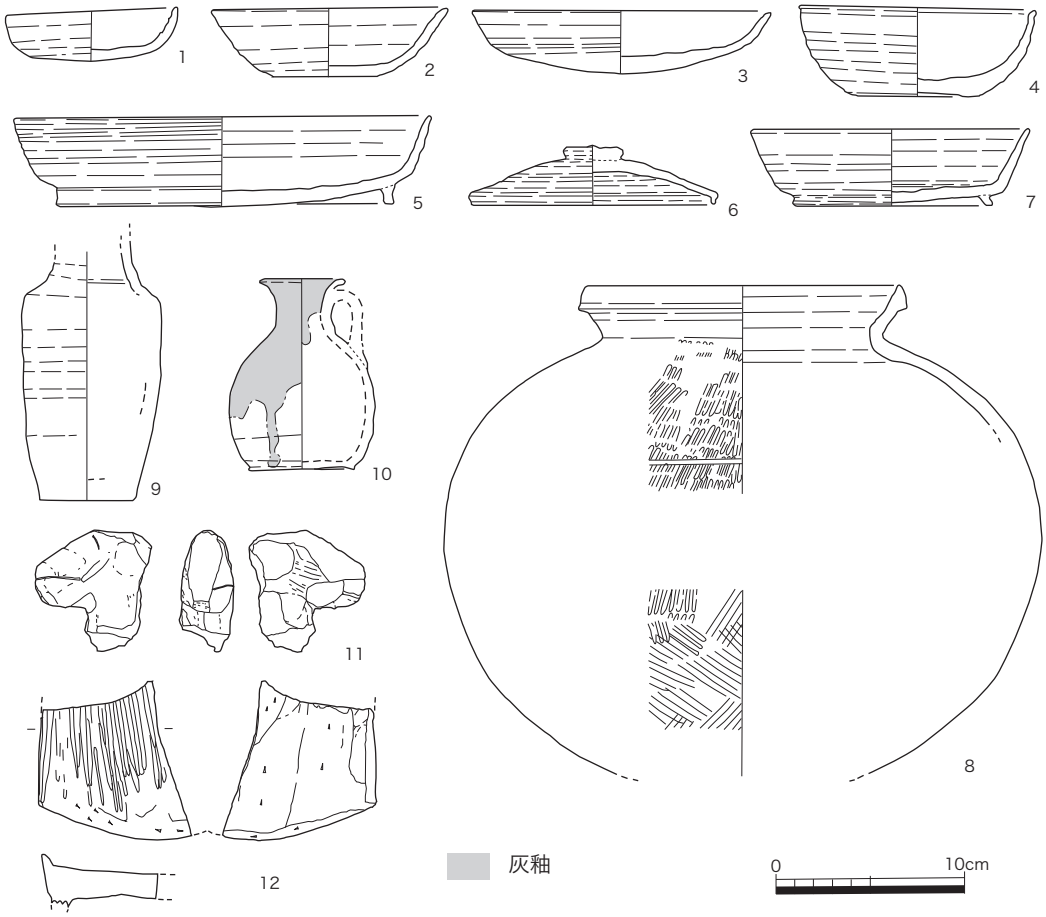


図６　北丹波・東流遺跡採集資料（1:4）

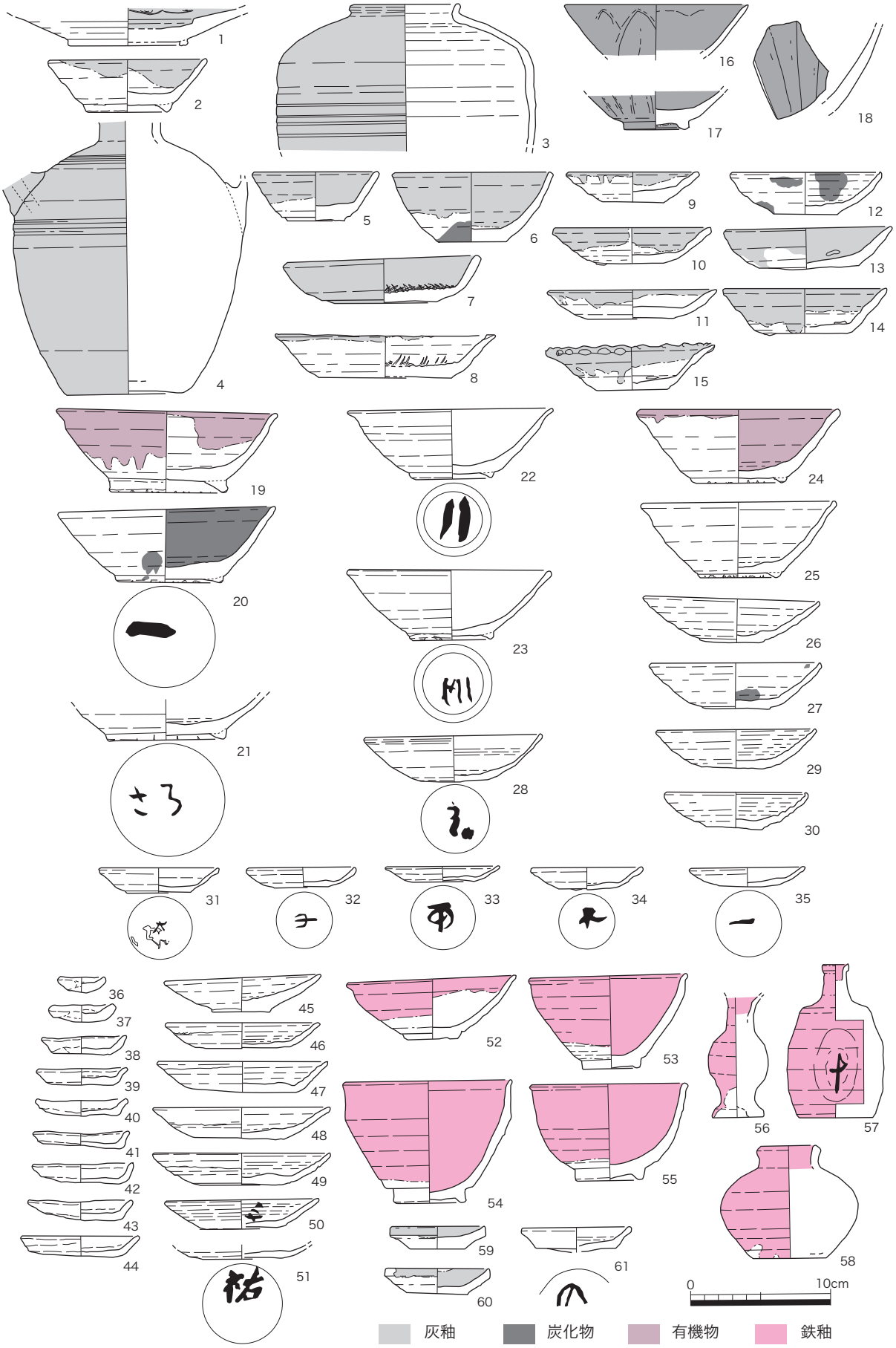


図７　青木川付近採集資料（1:4）

と 12 に炭化物の付着がある。16 ～ 18 は青磁器の椀である。19 ～ 29・31 ～ 35 は灰釉系陶器で、19 ～ 29 が椀、31 ～ 35 が小皿である。19 と 24 には有機物が付着しており、その他の椀や小皿にも付着するものが数点あった。20 ～ 23・28・31 ～ 35 に墨書が認められ、20・35 が「一」、21 が「さろ」、22 が「二」、23 が「三 (カ)」、28 が「え ,,」、31･34 が「大 (カ)」、32 が三叉状の記号である。20・27 に炭化物の付着が見られる。30 は大窯期初頭の無釉椀である。36 ～ 51 は土師器の皿で、鎌倉時代から江戸時代前期にかけてのものである。36 ～ 44 が小型の皿、45 ～ 51 が口径 11cm 前後ある大型の皿で、36 ～ 44 が手ずくねのもの、45 ～ 51 が轆轤引きによるものである。46 ～ 49 は外面中央に粘土紐のつなぎ痕らしき痕跡がみられる。52 ～ 58 は鉄釉の施された陶器で、52・53 が室町時代の天目茶椀、54 と 55 が江戸時代の天目茶椀、56 が江戸時代後期の小壺、57 が「十」の墨書がある胴部に凹みのある江戸時代後期の瓶、58 が江戸時代の短頸壺である。59 ～ 61 が江戸時代後期の小皿で、59・60 は灰釉が施されており、61 には墨書がみられる。

青木川の付近（川原）にも関わらず、古代から江戸時代まで連綿とした営みが想定され、全て青木川に廃棄した遺物である可能性もあるが、原氏の記録からは付近が集落の一部であり、付近に何らかの施設が存在した可能性が高い。また古代にかかる遺物を除くと下津城跡出土遺物の構成と類似する。

（4）小結

以上、決して十分とはいえないが、次の 2 点が指摘できる。

① 中世における主要な遺跡として、稲沢市国府宮地域にある尾張国府跡、稲沢市下津地域にある下津城跡・鎌倉街道周辺遺跡・下津北山遺跡・下津新町遺跡、一宮市丹陽町伝法寺地域にある伝法寺廃寺跡があり、特に尾張国府跡と下津城跡・鎌倉街道周辺遺跡・下津北山遺跡・下津新町遺跡は中世尾張国の政治・文化の中心地と想定される遺跡である。

② 下津城跡・鎌倉街道周辺遺跡・下津北山遺跡・下津新町遺跡は付近に広がる長野北浦遺跡・下津長田遺跡・下津小井戸遺跡・五輪ヶ淵遺跡を含む地点からなる一連の遺跡群と考えられ、中世下津宿を形成する下津遺跡群と考えられる。

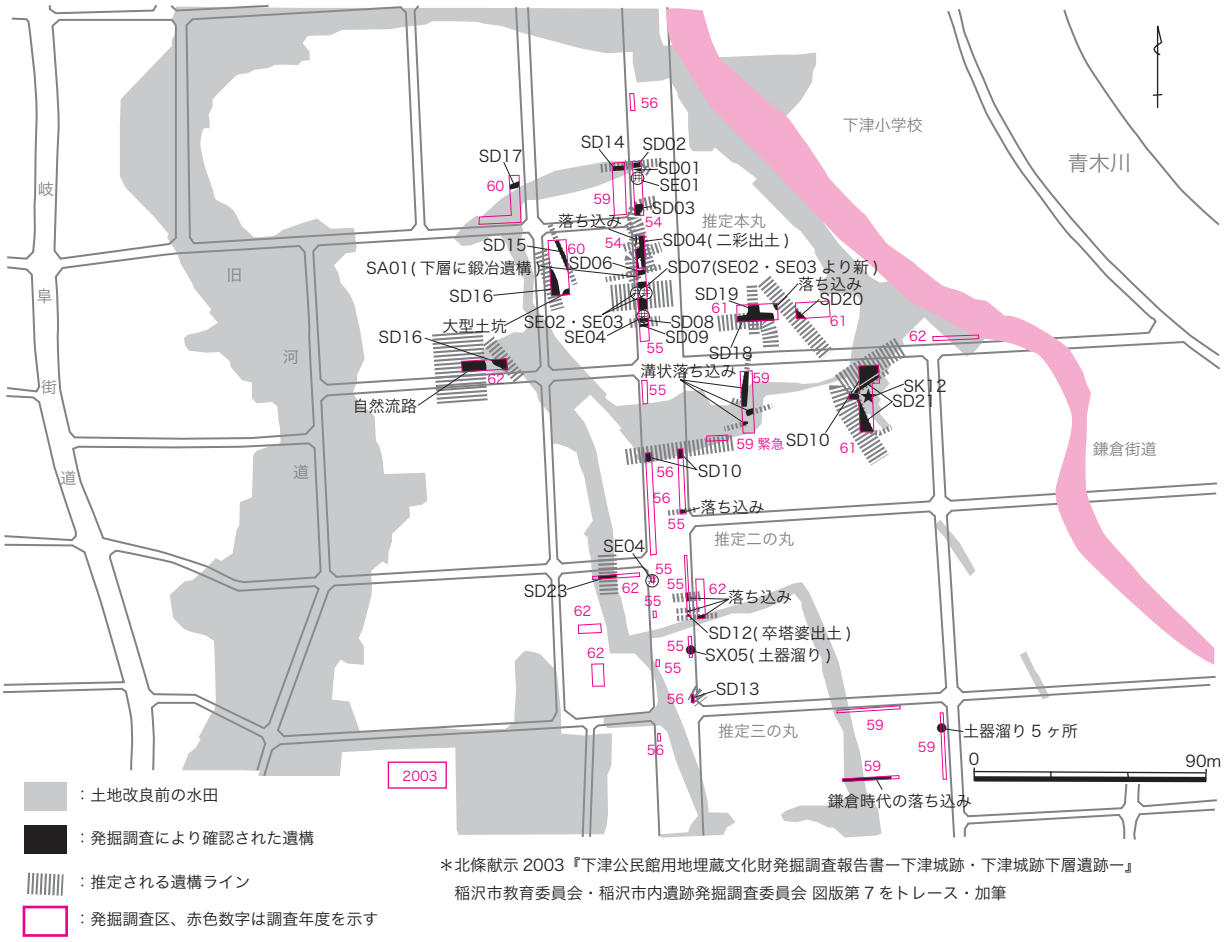
（蔭山誠一）

中世下津宿の景観と性格

中世下津宿の景観を考えるにあたり、下津を流れていた旧河道の想定と中世東海道のルートを検討し、その後中世下津宿に関連する考古学的知見、文献に残る記録などから、下津宿の性格に迫りたい。

（1）下津城跡発掘調査の再検討（図 8）

中世における東海道が下津のどの地点を通っていたのかは、地籍図等から下津城跡の復元が『新修稲沢市史』で検討され、連郭式の下津城の想定と現在の青木川の西側の堤防に沿って中世の東海道「鎌倉街道」が想定された（井上 1984）。その後稲沢市教育委員会により下津城跡付近の発掘調査が行われ、『新修稲沢市史』において想定された連郭式の下津城跡とは異なる調査所見が提示された（日野 1987）。その後守護所シンポジウムにおいて鈴木正貴が近年の考古学的成果を取り入れて、青木川の西側堤防付近と明治 17 年の地籍図にみえる道に沿って、中世の東海道が想定され、その西側に沿って寺社が分布し、その北に方形区画の溝に囲まれた館が複数並ぶ構造が推定された（鈴木 2004）。今回の分析もこれまでと同様であるが、稲沢市教育委員会による調査成果を再検討し、『新修稲沢市史』において想定された下津城跡に調査により確認された 14 世紀から 17 世紀初頭の主要な遺構を表現した（図 8）。発掘調査を再検討した結果、① 54 年度と 55 年度の北側調査区において確認された溝と井戸は井戸が全体に古く、その後溝が掘削されて 16 世紀中頃までに埋没しているものが多いこと、②発掘調査でみつかった溝は現在の青木川の流れに近い方位をもつ溝が下津城跡の東側に多く、正方位の軸線をもつ溝が下津城跡の西側を中心に分布しており、方形区画を指向する溝が複数重複する状況が窺われる。③先に述べたが 55 年度に調査された SD07 や 61 年度に調査された SD10、同 SD20、同 SD18 などは、幅 5 m を超える大溝であり、61 年度に調査された SD10 は方形



＊北條献示 2003『下津公民館用地埋蔵文化財発掘調査報告書ー下津城跡・下津城跡下層遺跡ー』
稲沢市教育委員会・稲沢市内遺跡発掘調査委員会 図版第７をトレース・加筆

図８　下津城跡主要遺構配置図（1:3,000）

区画の西角にあたり、大毛池田遺跡において確認された一辺 100m 程の区画溝（幅 3.9m ～ 7.2m）と同じ規模をもつ可能性がある（武部編 1997）。

①～③の分析から、下津城跡付近には一辺 100m 前後の方形区画をはじめとする方形区画が多数存在したものと考えられ、61 年度に調査された SD10 の東側は現在の青木川付近までのびていた可能性がある。よって『新修稲沢市史』により想定された「鎌倉街道」は SD10 による方形区画の内部を通過する可能性が高く、中世の東海道は別地点を通過したものと考えられる。また 61 年度の調査による SD10 は地籍図にみられる低地部９と重複する地点であることから、地籍図に残る低地部９（旧青木川の河道痕跡と考えられる）も 16 世紀以後に形成されたものである可能性が高く、原米吉氏資料である青木川出土資料の存在も考え合わせると、中世の青木川は現在の青木川付近を流れていなかった可能性が高い。

（２）下津を流れる旧河道と津の想定（図２・図４）

それでは、下津を流れる旧河道はどの地点を流れていたのであろうか。先に分析した結果からは、地籍図に残る低地部９は 16 世紀以後の旧河道痕跡を反映したものである可能性が高いが、下津北山遺跡において確認されている自然河道跡は低地部９に対応するもので、弥生時代末から中世にかけて存在した旧河道が低地部９に存在したことが確認されている。よって、地籍図の分析から中世以後の旧青木川の流路痕跡である低地部９を旧河道Ａとし、中世において低地部５を流れ、低地部９に合流していた想定した旧三宅川を旧河道Ｂと仮称したい。また先の地形図の分析から現在の青木川から東西に振れる谷地形が認められる。この中で現在の一

宮市丹陽町九日市場付近から妙法寺北東側を通り、現在の一宮市丹陽町九日市場と一宮市丹陽町伝法寺の境界付近、一宮市丹陽町五日市場と一宮市丹陽町伝法寺の境界付近を経由して南下する谷地形が地形Ｆの東側微高地群である微高地群 15 の中にある窪地ａ～窪地ｅの位置と対応する。地形Ｆは古代以前の地形である地形Ｍより新しい地形であり、形成時期は中世以後の可能性がある。この谷地形と微高地群 15 の中にある窪地ａ～窪地ｅと対応する部分を旧河道Ｃと仮称する。また地籍図には低地部として表現されていないが、地形図の解析により一宮市丹陽町三ツ井にある現青木川と現緑葉川の合流地点付近から南西の稲沢市赤池寺東町、赤池北町にある金龍寺付近を経て、稲沢市赤池北池田町、稲沢市陸田東出町付近に至る谷状地形が認められる。この谷地形の南側微高地に現在の南側赤池集落が立地し、北側微高地は旧河道Ｂである低地部５の東側を閉じる微高地群 14 を構成するものである。よって中世の旧河道と推定した旧河道Ｂより新しく、現在の青木川に近い旧河道Ａより古い旧河道が存在した可能性がある。このように考えると現在の下津地域を流れる青木川は地形図の解析において指摘があるように、江戸時代以後の新しい河道である可能性が高い。同様に地形図の解析から微高地を切って流れる現在の五条川は別に地点を流れていた可能性があり、現在とは別のより南の地点において旧河道Ｃと合流していた可能性が高い。

以上から下津を流れる４つの旧河道を想定した。この中で鎌倉時代の『沙石集』に記述された「下津川」は旧河道Ｂから旧河道Ａが合流して流れていたものと考えられ、中世東海道が交差する比較的大きな川であった可能性が高い。

次に現在の地名に残る「戸」地名や地理学的な河の淵を船着き場と想定する立場から中世下津の港を推定する。現在まで地名に「戸」がつく字地名は稲沢市下津小井戸町付近の下津村字「小井戸」、稲沢市下津片町付近の下津村字「高戸」、稲沢市下津本郷町付近の下津村字「飛戸」、稲沢市長野３丁目付近の長野村字「小井戸」の４地点があり、稲沢市下津小井戸町付近の下津村字「小井戸」と稲沢市長野３丁目付近の長野村字「小井戸」は隣接する地点で、本来は一つのまとまりをもつ地域を呼んでいた可能性がある。先に分析した旧河道Ａの九日市場村西端付近から下津村字蛇池付近にみられる河道が北から西に折れる河の南淵川の地点が下津村字「高戸」地点であり、また旧河道Ａがさらに西に下って東から南南西に折れる北西側淵が下津村字「小井戸」と長野村字「小井戸」地点にあたる。さらに現在の青木川に関連する旧河道が下津村字飛戸付近にて小さく西側に淵を形成する地点に下津村字「飛戸」がある。これらは旧河道が折れる地点に存在し、河の淵を利用した船着き場が存在した可能性がある。

（３）中世東海道の想定（図２・図４）

次に旧河道の想定から中世東海道の通過地点について分析する。先に分析した下津城跡の発掘調査成果からは、現青木川が別の地点である旧河道Ｃ付近を流れていた可能性が指摘でき、これまでの研究において想定されてきた中世東海道とは、別の地点を通過していた可能性が出てきた。今回の地籍図の分析からは、明治 17 年における土地利用から想定できる微高地を中世東海道が通っていたと仮定すると、京都から下津にきた中世東海道は旧河道Ｂの南側微高地群７の上を通り、旧河道Ａの西岸である微高地群 14 を経て、微高地群 15 ～微高地群 18 のいずれかの地点を通り、清須・萱津方面に向かうこととなる。そこで現青木川に近い地点においてみつかった溝が現青木川に沿った方位をもつ点と、古い寺院・神社付近を通過する可能性に留意して、さらに現在の地形図にみえる高まりを中心に中世東海道が通過したとすると、下津城跡付近で大きく２つの通過地点が想定できた。京都からきた中世東海道は稲沢市赤池西出町南端付近から東へ同赤池町西岸寺南側を経て、南東へ同赤池北町の金龍寺の南側、赤池東山町西側、赤池坂畑町西側に至る。１つ目のルートは、稲沢市赤池坂畑町から南西の稲沢市下津光明寺町北側を通り、下津片町の現在に残る岐阜街道付近を南下して、旧河道Ａ北岸の瀬西側である地点から旧河道Ａ南岸の瀬北東側地点を渡河する、さらに稲沢市下津新町南側を東に折れて同下津大門町中央部を東に抜けて、広憧寺南西を通り、同下津本郷町を西南西にのびて行人橋付近に至る。２つ目のルートは稲沢市赤

池坂畑町から南東に丹陽橋付近を経て、一宮市丹陽町九日市場の西側を南南東から南東方向で蛇行して一宮市丹陽町五日市場の現青木川付近を通り、行人橋付近に至る。行人橋付近から同一のルートとなり、南南東へ稲沢市下津北信正寺町東側を通り、下津南信正寺町北側で南西に折れて、同下津下町東の阿弥陀寺南西を経て、下津町南側にて現岐阜街道とほぼ合流するルートが想定できる。このように想定できるならば、中世東海道は下津五日市が想定される一宮市丹陽町五日市場西側を経ることとなり、市と街道との関係が生じてくるものと思われる。

（4）中世下津宿の景観（図９）

以上の検討から中世下津宿の流れる旧河道、津・船着き場、中世東海道を想定した。また先に分析した文献資料から確認できる地名・機関、下津周辺の発掘調査成果等から検討した成果を地図の上に描いたのが図９である。中世下津宿の中央には北西の一宮から流れる旧河道Ｂと北東の小折・犬山から流れてくる旧河道Ａが下津北端で合流し、南下する中で旧河道Ｃが南東に分流して下津五日市場の東側と下津正眼寺跡の西側を流れる。また旧河道Ａはさらに南下して西に折れ、さらに南に折れ、もう一度西に折れて、万徳寺の北西側でさらに南に折れて南西方向に流下する。これらの旧河道が折れる河の淵側に船着き場である津が２ヶ所想定された。まさに「折戸」の状況を想定できる。この旧河道Ａの南西方向は稲沢市目比町へ流れ、現目比川の旧流路となり、南東方向は海部郡甚目寺町へ流れ、現福田川の旧流路となる可能性が高いものである。旧河道Ｃはさらに南下して旧五条川と合流して清須・萱津に至る。

付近の遺跡では拠点的集落と考えられる尾張国府跡、下津とは水田域を挟んで館跡も想定できる伝法寺廃寺跡などが存在し、周囲には大小の町場や館を含んだ拠点的集落や館群が点在して展開していた可能性が高い。これらの分布は周囲の遺跡分布と併せて、中世前期から文献資料上に登場する陸田村・赤池村・長野（長沼）村等の「村」の形成、同じく下津の起源となった可能性のある下津御厨、陸田御厨・赤池御厨が点在する。また『吾妻鏡』など文献資料にみられる赤池宿も鎌倉街道周辺遺跡の北側を中心に、旧河道Ａ北西岸に位置する稲沢市赤池北町・同赤池中町・同赤池東山町・同赤池坂畑町・同赤池広畑町・同下津光明寺町町付近に存在した可能性がある。

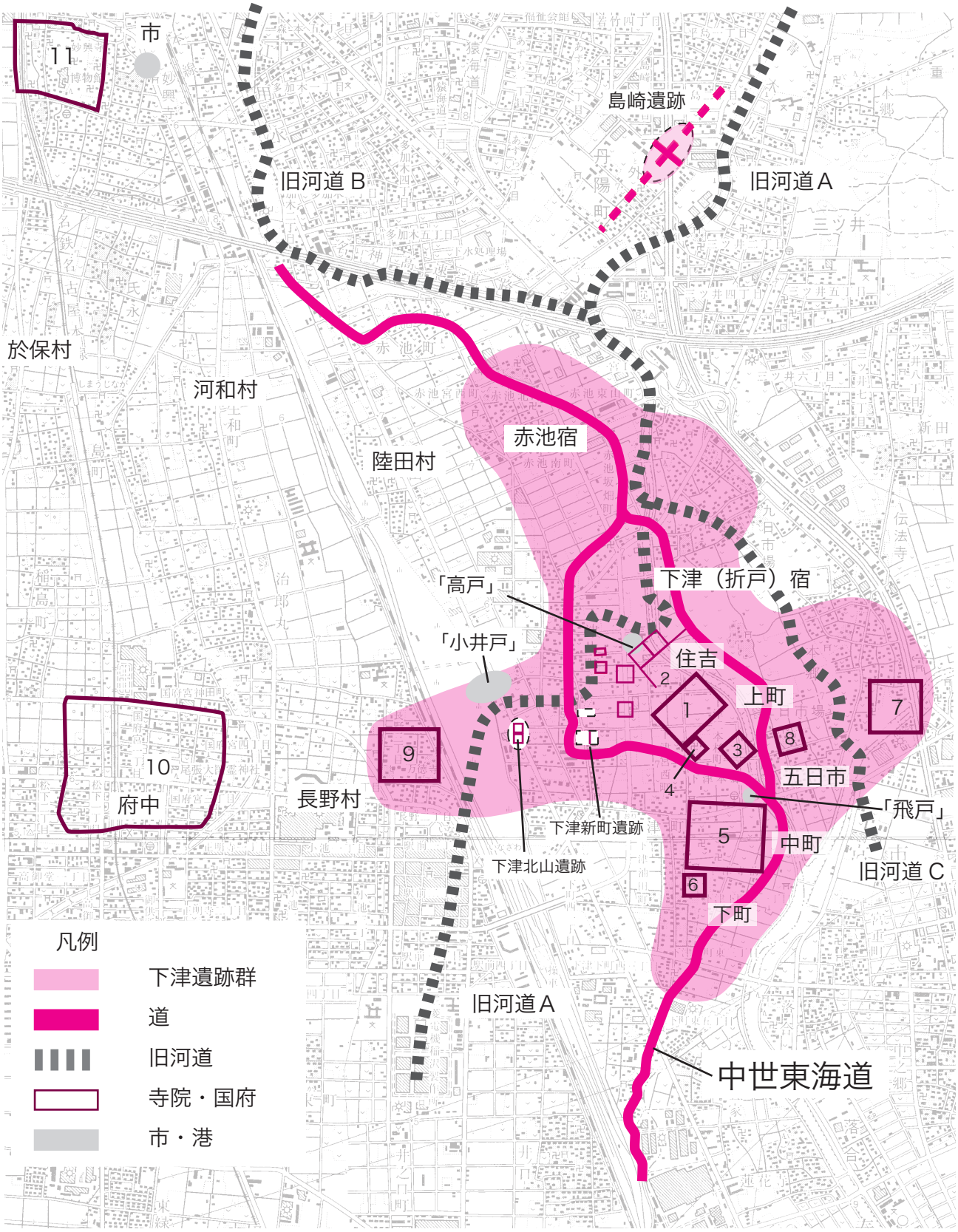
下津宿内部では旧河道Ａの下津村字高戸付近に船着き場の南に方形区画からなる大小の居館等が展開し、中世東海道が旧河道Ａを下津西側で渡河する地点の西側には 12 世紀の寺院関連の遺構が確認された下津北山遺跡、その西側ルートが東に通過する北側で調査された下津新町遺跡では町屋遺構の可能性のある小規模な長方形区画がみつかっている。この西側ルートの北西に住吉神社や頓乗寺跡が存在し、下津五日市、下津下町へと続く。

以上の分析から当然の帰結であるが、中世下津宿は中世東海道上に位置する京都と鎌倉を結ぶ主要なネットワークであり、地域の旧河道を利用した物流の東西南北の要に位置する経済の中心地と考えられる。また室町時代には尾張守護所が設けられ、政治・文化の中心地の様相も併せ持っていたことが推定できる。（蔭山誠一・鈴木正貴・鵜飼雅弘）

まとめ　–今後の課題–

今回は、中世の尾張国中島郡下津周辺を素材として取り上げ、その景観復元を主目的として検討を行った。我々は、考古学的手法だけにこだわらず、多角的視野からの総合的な研究を目標とした。

これまでに我々は、まず尾張国冨田荘を素材とし、中世集落の総合的研究を目指してスタートし、その景観復元を試行しつつ歩き出した。そこでは、文献の調査と現地踏査を基本としながら、地籍図の分析、地質学的な分析を加えた。その分析結果は、平成 15 年度の愛知県埋蔵文化財センター『研究紀要』第５号にて、一定の成果を導き出したと考えている（中・近世研究部会 2004）。さらにこれらの研究成果をもとに、新たに海部郡萱津周辺を素材として選定し、さらなる景観復元を試みた（蔭山他 2007）。手法は前回の経験を活かすため、地籍図の土地利用状況をより注意深く検討することによって微高地群と低地部を推定し、その対応関係を導き出



1　頓乗寺（尾張守護所）　2　住吉神社　3　薬師堂　4　広幢寺　5　円光寺　6　阿弥陀寺
7　正眼寺　8　法正寺　9　万徳寺　10　尾張大国霊神社（尾張国府推定地）　11　妙興寺

図 9　中世の下津の復元イメージ図（1:30,000、国土地理院発行地形図 25,000 分の 1 の清洲・一宮を縮小）

した。その分析結果は、平成19年度の同『研究紀要』第8号にて、発展的な成果として発表した。そして次なる素材を求めた結果、五条川をさかのぼり青木川に分け入った下津地区を選定し、景観復元を試みたのが今回の分析である。

まず、文献資料の分析では、断片的ながら下津周辺の記述資料を抽出し、中世東海道（鎌倉街道）における折戸宿と赤池宿が、鎌倉時代に併存した可能性を見出した。さらに寺院の消長を各資料より確認して、不安定な運営や廃絶地点の地名との関連を推定した。

地籍図の分析においては、これまで同様に明治期における土地利用の実態から微高地と低地を割り出し、21微高地群と22低地部を認識した。これらの相対関係から、河川堆積の痕跡を旧三宅川、旧青木川、その他の旧河川に分けて抽出し、旧河道の流れに時期的変遷を推定した。この推定した旧河道痕跡からは、古代の重要な遺跡が多数立地する地形Aが、旧三宅川に伴うものであることを推定することができた。さらに伝法寺本郷遺跡、下津北山遺跡の発掘調査成果は、地形の形成過程を分析する好資料となり、旧河道の変遷を推定するに至った。

これらの分析に加えて、現在の測量図に記された標高値から、等高線図を作成して地形解析を行った。その結果、今回の分析対象地点では、現在の河川流路には並行にのびる等高線がほとんど認められないことから、旧地形の推測が難しく形成年代がより新しい可能性を見出した。

考古学的調査においては、中世における下津周辺の遺跡分布状況から、そのまとまりを一連の遺跡群とし、尾張国における中心的存在と位置付けた。すなわちこの下津遺跡群はその規模として、南北は鎌倉街道周辺遺跡範囲である約3km、東西は五輪ヶ淵遺跡から長野北浦遺跡、万徳寺までの約2.5kmを測り、遺構、遺物の検討からその盛期は13～15世紀頃で、中世東海道および周辺の河川によって立地が特徴付けられる遺跡の集合体と捉えられる。この中で、先述した中世東海道の折戸宿と赤池宿は、川をはさんで100m以内で対峙し併存する。この点を渡河地点であるがゆえの併存と考えれば、この地点の重要性が浮かび上がってくるであろう。街道における渡河地点は、待機的な機能も含めて、片側の岸だけに存在したとは考えにくい。先述した『研究紀要』第8号にて行った萱津宿の分析は、庄内川の対岸にあたる萱津東宿について、渡河地点という視点で位置付けていなかった。折戸、赤池両宿の関係を考慮すると、萱津宿対岸についても同様の評価が可能と思われる。本センターによって調査された島崎遺跡では、併行する二条の溝が検出され、道路遺構の可能性が指摘されているが、北東から南西方向を向く延長には、中世東海道が通っていたはずであり、検出された溝を南西方向に延伸して合流点を想定すると、赤池宿周辺がこれにあたる。この合流の想定が成立するならば、折戸、赤池両宿の重要性はさらに増すであろう。

下津周辺の旧河道は、自然地理的な環境として近世に至るまで、概ね北東から南西方向へと流下している。微高地群と低地部から導き出されたこの分析結果は、地形の形成に反映された交通手段に対して、一定の方向性を発生させることになる。すなわち、微高地を利用した道の存在や、河川を利用した水上交通など、移動する方向に制限をもたらす。下津城周辺にて確認される区画溝が、東側では現在の青木川の流れに近い方位を示し、西側では正方位を示す違いは、こうした自然地理的な環境に制限されてのことなのか検討する必要がある。下津周辺は、それぞれの区画溝に合わせた方向の広がりが、時間軸の中で確認できるかどうかによって空間的性格が違ってくる。実態に近づくためには、更なる発掘調査事例の追加が必要であり、この地域においての遺跡としての認定を整える必要があるであろう。そして、この分析対象となる地域を広げて、総合的な地域研究とすることが課題と考える。これまで提示してきた共同研究の試みが、今後更なる分析材料を積み上げることによって、より具体的な景観を導き出す一助となれば幸いである。（松田 訓）

謝辞

本論を作成するにあたり、稲沢市教育委員会北條献示氏、一宮市博物館土本典夫氏、同久保禎子氏、同坪内淳仁氏、愛西市教育委員会石田泰弘氏には多くのご教示を受けた。また稲沢市と一宮市の各諸機関には都市計画図の入手に際

して便宜を図っていただいた。地形解析図の原図の作成では愛知県埋蔵文化財センター整理補助員の前田弘子氏と村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

参考文献

宮田用水普通水利組合 1944『宮田用水史』上巻、金明堂印刷所

彌永貞三編 1977『新編一宮市史』本文編上　一宮市

上村喜久子 1979「中世尾張の「村」について」『名古屋市博物館研究紀要』第２巻名古屋市博物館

水野柳太郎編 1983『新修稲沢市史』資料編七　古代中世、稲沢市

井口喜晴 1984「下津城跡」『新修稲沢市史』資料編六　考古、稲沢市

日野幸治 1987『下津城跡発掘調査報告書（Ⅲ）』稲沢市教育委員会

水野柳太郎・小島廣次・塩澤君夫編 1990『新修稲沢市史』本文編上、稲沢市

武部真木編 1997『大毛池田遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 72 集）財団法人愛知県埋蔵文化財センター

三鬼清一郎編 1998『新編名古屋市史』第２巻

稲沢市史編纂委員会編 1999『稲沢の街道Ⅰ―鎌倉街道と岐阜街道』稲沢市教育委員会

小島孝之校注 2001『新編日本古典文学全集 52 巻 沙石集』小学館

愛知県史編纂委員会編 2001『愛知県史』資料編８ 中世１、愛知県

中・近世研究部会 2004「尾張国冨田荘の考古学的研究―成願寺を中心として–」『研究紀要』第５号、財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター

鈴木正貴 2004「織田信長の都市づくりの源流―尾張守護所の景観復元研究から考える–」『守護所・戦国城下町を考える』守護所シンポジウム＠岐阜研究会・岐阜市歴史博物館

愛知県史編纂委員会編 2005『愛知県史』資料編９ 中世２、愛知県

蔭山誠一・加藤博紀・鬼頭剛・鈴木正貴・松田訓 2007「中世萱津を考える」『研究紀要』第８号、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

榎原雅治 2008『中世の東海道をゆく–京から鎌倉へ、旅路の風景–』中央公論新社

加藤博紀 2009「地籍図・村絵図による河道の検討」『下津新町遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 159 集）財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

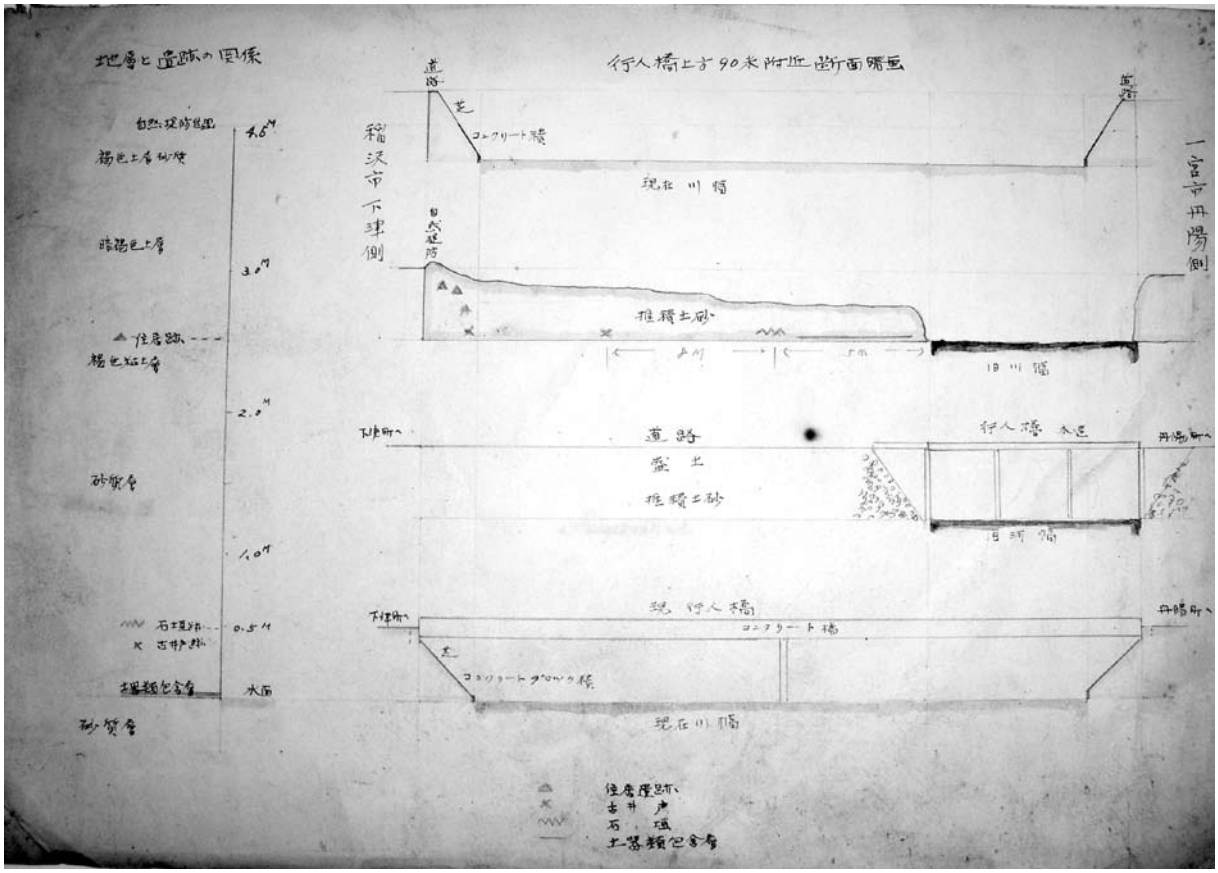


写真１　青木川付近採集資料の原米吉氏記録メモ（一宮市博物館蔵）